

一般社団法人 全日本ピアノ指導者協会 (ピティナ)
調査研究報告書 第1号

フランスの芸術教育に関する諸調査

子どもの可能性を広げるアート教育～フランス編

菅野恵理子

子どもの可能性を広げるアート教育～フランス編

目次

1. 子どもの可能性をひらくとは？——多様性に満ちた世界を見せる

第1回 音楽劇を通して「日常とは違う世界」の扉を開く 2

2. 子どもはどこで音楽とふれあう？——芸術的刺激に満ちた環境づくり

◎家で・街で——

第2回 ドビュッシーの音楽を絵本で楽しむ 5

第3回 フェット・ドウ・ラ・ミュージック～音楽と戯れる1日 10

◎学校で——

第4回 お母さまが提案した小学校の音楽ワークショップ 13

第5回 「感」から「知」に変える音楽の聴き方～フランスの小学校で行われた実験 16

第6回 高校生はどう現代音楽と出会う？ 19

◎ホールで——

第7回 音楽をどう魅せる？パリ管の子どもプログラム 22

第8回 いろいろなリズムを体感してみよう！ 27

第9回 オーケストラによる子供向けコンサート比較 29

3. 子どもはどう音楽を学ぶ？——自分の視点で音楽にアプローチ

第10回 生きた音楽で学ぶ、新しいソルフェージュ 33

第11回 芸術性を高めるソルフェージュを目指して(1) 中級レッスン 38

第12回 芸術性を高めるソルフェージュを目指して(2) 音程・和声進行 40

第13回 芸術性を高めるソルフェージュを目指して(3) 音程・即興 42

第14回 音楽知識と感覚を結びつけるアナリーゼとは(1) パリ音楽院アナリーゼ科 45

第15回 音楽知識と感覚を結びつけるアナリーゼとは(2) 自分の感覚で捉えること 48

4. 子どもはどれだけの可能性を持っている？

第16回 「子ども脳」がもつ無限の可能性 51

第17回 質問を通して学びを深める～小学校と高校の授業風景から 53

5. フランス発！ユニークな音楽祭

第18回 リール音楽祭～多彩なショパン観が登場 56

第19回 ラ・ロック・ダンテロン音楽祭～小さな村から発信する大きな音楽のエネルギー 59

※本報告書は、ピティナ Web サイト (<http://www.piano.or.jp/>) 連載コラム『子供の可能性を広げるアート教育～フランス編』(http://www.piano.or.jp/report/03edc/art_frnc/ 2008年6月～2009年8月掲載)をまとめたものです

1. 子どもの可能性をひらくとは？——多様性に満ちた世界を見せる

第1回 音楽劇を通して「日常とは違う世界」の扉を開く

※ 2008年6月13日掲載分

ドビュッシー、ヤナーチェク、ストラヴィンスキー、ショスタコーヴィチ、ヒンデミット、クセナキス、メシアン、レヴィナス*……。近現代曲ばかりのステージというと、「えっ、ちょっと難しそう！……」と一瞬思われるかもしれない。

じつはこれらは、子どもを対象にした音楽劇で使われた曲なのである。「子どもに理解できるかしら？」という大人の心配をよそに、聴いている子ども達は皆ワイワイ、ニコニコ。その人気の秘密は一体？

さて、このシテ・ドウ・ラ・ミュージック (Cit  de la Musique) は、毎週水・木曜日の午後になると、元気な小学生や子どものグループで賑わう。子ども向けの音楽ショーが行われるからだ。毎年約 14,000 人の観客動員があるそうだが、その人気の秘訣は？音楽に興味を持たせるために、どんな工夫がなされているのだろうか？

フランスでは子ども達に音楽に興味を持ってもらうため、さまざまな仕掛けをしている。第1回目は、シテ・ドウ・ラ・ミュージックの例をご紹介します。

*Micha l Levinas (1949～)

キーワードは「多様性」。子どもに知ってほしい、いろいろな音やリズム



パリ 20 区にある広大な敷地に、シテ・ドウ・ラ・ミュージック (音楽都市) と呼ばれる一角がある。コンサートホール、劇場、音楽博物館、音楽資料館、ミュージックショップが併設された、総合音楽施設である。アンサンブル・アンテルコンテンポラン (Ensemble InterContemporain 名誉総裁：ピエール・ブーレーズ、ソリスト：永野英樹ら) をアーティスト・イン・レジデンスに迎え、20 世紀音楽の初演等に力を入れる一方、パリ国立高等音楽院を始め、教育分野との繋がりも深い。まさに演奏・実験・研究・教育が一体化された音楽都市なのである。

この館内は毎週水・木曜日の午後になると、音楽劇を見にくる元気な小学生や子どものグループで賑わう。年間 60～70 回ほどの公演に対して約 14,000 人の観客動員があるそうだが、音楽に興味を持たせるために、どんな工夫がなされているのだろうか？

■マリス・フランクさん (シテ・ドウ・ラ・ミュージック芸術顧問・青少年プログラム担当) インタビュー *

同プログラムを担当して 7 年になる、マリス・フランクさん (Maryse Franck) にお話をお伺いした。

「フランス国内外の劇場やフェスティバルを訪れて、年間 200 本ほどの公演を視察し、その中から 20 公演を選んでいきます (年間約 20 公演×3 回)。選考の際に気を配っているのは、『多様性』です。さまざまな年齢 (3 歳～12 歳)、さまざまなスタイル (コンサート・ミュージカル・劇・パントマイム・人形芝居など)、さまざまな音楽のスタイル (クラシック、ジャズ、シャンソン、ポップス、世界各国の民族音楽など) を、バランス良く取り上げるようにしています。選考に際しては、まず私自身が最初の聴衆として、「これは面白い！」と思う公演をピックアップします」。

——作品選びのポイントは？

「世界や他人を知るきっかけとなり、革新的で現代的な形式の作品を探しています。今はテクノロジーを使った作品や、新しい音楽様式のものも一部組み込んでいます。子どもはすべての作品にアプローチできるし、聴く機会もかぎりなくあっていいと思うのです」。



現代曲を生き生きと聞かせる演出とは？

クラシック音楽をメインにした公演は、今シーズン4回。冒頭の通り、いずれも近現代曲が多く用いられている。

「昨年12月に、『鳥さんのことば (Parole d'oiseau!)』という音楽劇を行いました。オデッセイアンサンブル&シー (Odyssee ensemble & cie) というクインテットが出演したのですが、クセナキス、メシアン、レヴィナス、クラヴツィーク*と、全て現代曲でした。ただ演出がとても工夫されていて、鳥をテーマにした曲に統一し、メンバー全員が鳥の衣装に身を包み、鳥のような動きをしながら演奏していました。4歳以上の子どもを対象にしたのですが、皆とても熱心に、興味深く耳を傾けていましたよ」。



現代曲というと、ちょっと苦手意識を持ってしまいがち……だが、そこはアイデア次第！曲をどのような順番に並べ、どのようなストーリー展開で繋げていくか、演奏者やステージをどう演出するのか、どのように動いて音楽の世界を表現するのか——そこに工夫を凝らしているのである。聴覚への刺激と同時に、視覚的効果を上手に生かすことで、子どもはすっとその空間になじみ、音を身体全体で受けとめることができるのかもかもしれない。



別の日に行われた音楽劇『月と仲違いしたピエロ (Pierrot fâché avec la lune)』では、ピアノとチェロの演奏に合わせて、2人の役者がパントマイムでストーリーを展開していく。曲目はドビュッシー、ヤナーチェク、ルトスラフスキー*。例えばドビュッシーのプレリュード第2巻《風変わりなラヴィエヌ將軍》では、パントマイムの動きも大きくユニークに。また《交代する3度》では、小刻みなリズムにのせて、パタパタとお化粧をしている女性の動きを、鏡合わせのようにピエロ役が真似する。音楽に合わせた動きが笑いを誘ったり、時には子どもが

「わーん」と泣き出す場面も。とにかく子どもが音楽の世界に引き込まれているのが分かる。

ちなみにピアノはデルフィーヌ・バルダンさん (Delphine Bardin, 97年クララ・ハスキル国際コンクール優勝)、チェロは世界的に活躍中のオフェリー・ガイヤールさん (Ophélie Gaillard) と、演奏のクオリティも高い。70分間のショーが終わった後、子どもたちはちょっと興奮した様子で会場を後にしていた。

*Franck Krawczyk (1969～)

*Witold Lutoslawski (1913～94)

音楽劇を通して「人生」も見せる、そこにタブーはない

さらに音楽を楽しく聞かせるだけではなく、もっと深い意義もあるようだ。

シテ・ドゥ・ラ・ミュージックの公演プログラムには、シーズン全体のテーマとそれに関連したウィークリー・テーマが決められており、子ども対象の音楽劇も、概ねこの方針に沿っている。2007～8年度年間テーマは「宗教と世俗 (Sacré et profane)」。

前述の『鳥さんのことば』は、「芸術の中の精神性 (Du spirituel dans l'art)」というウィークリー・テーマに沿って選んだようだ。同週、一般・大人対象のコンサートでは、メシアンピアノとオーケストラの作品《異国の鳥達》が演奏されており、子どもと大人のプログラムに連続性が見られる。

「毎週月曜日にプログラム選考ミーティングを開き、皆と意見を交わしながら、年間プログラムを構成していきます。選考メンバーは7人で、一般コンサート・プログラム担当者、美術館担当者、音楽学者、そして哲学者も含まれています」。

哲学者も含まれているとは、フランスらしい。さらにフランクさんは、こう付け加えた。



「エンターテインメントや教育の要素だけではなく、生や死、愛…といった人生のさまざまな局面を見せることも大事だと思います。学校や家族に囲まれる日常生活とは違う世界を垣間見せる入り口になりますね。それらは人生の一部であり、タブーではないのです。もちろん、子どもに話すのは難しいですけどね」。

「タブーはない」と言いきる潔さは、文学で養われた深い人間理解と、豊かな人生経験に基づいている。大学院でフランス近代文学を専攻し、修了後はフランス語教師、音楽情報センター勤務、楽器博物館員など、さまざまな仕事を経験。小さい頃はフルートやギター、ハーモニカを独学で、社会人になってからはコン

テンポラリー・ダンスを8年間習ったそうだ。子育ても一段落し、今は仕事と人生を謳歌している。

さて来シーズンは、どのような公演があるのだろうか？

「クラシック音楽が聞ける公演は、ドビュッシーのパレエ音楽『おもちゃ箱 (La Boîte à joujoux)』を題材にした音楽劇など、3つを予定しています。また、毎週土曜日には子ども用の鑑賞コンサートも行っています。是非いらして下さいね」。

子どもには無限大の可能性がある。だから、あらゆる時代や形式の音楽、さまざまな感情や感覚を知ってほしい。子どもには、それを感じて受けとめる能力が備わっているから、楽しく、たくさん伝えたい—あふれる情熱を胸に、フランクさんは今日もフランス全土を駆けめぐる！

* インタビュー動画 URL : http://www.piano.or.jp/report/03edc/art_frnc/videos/080603_mmefranck_new.wmv

* クラヴツィーク：日本では「クラフク」が一般的な表記

Cité de la musique

221, avenue Jean-Jaures 75019

01 44 84 45 00

<http://www.cite-musique.fr>

〈情報の宝庫！館内情報〉

・ 楽器博物館 (火曜日～土曜日：12時～18時 / 日曜日：10時～18時)

・ 音楽資料館 (火曜日～土曜日：12時～18時 / 日曜日：13時～18時)

<http://mediatheque.cite-musique.fr>

2. 子どもはどこで音楽とふれあう？

——芸術的刺激に満ちた環境づくり◎家で・街で——

第2回 ドビュッシーの音楽を絵本で楽しむ

※ 2008年6月27日掲載分

ドビュッシーのバレエ音楽《おもちゃ箱 (La Boîte à Joujoux)》を聴いたことはありますか？ドビュッシーが愛娘シュウシュウのために作曲し、ストーリー執筆も手がけた作品です。それが約100年の時を経て、現代風にアレンジされ、1冊の絵本になりました。絵とストーリーを読みながら、ドビュッシーの音楽を聴く。——さて、子ども達はどんな反応をするのでしょうか？



モローさん(左)とパストール氏(右)

今回は、絵本出版社ディディエ・ジュネス社 (Didier Jeunesse) ディレクターのミッシェル・モローさん (Mme. Michele Moreau)、音楽担当のダヴィッド・パストール氏 (M. David Pastor) に、絵本製作のプロセスや読者の反応についてお話を伺いました。

■ミッシェル・モローさん(ディディエ・ジュネス社ディレクター)・ダヴィッド・パストール氏インタビュー*

——CD絵本の楽しみ方は？

モローさん：CD絵本のねらいは、音楽に楽しむきっかけをさまざまな形で提案することです。本の装丁も美しく、その中には綺麗な絵と物語が描かれています。必ずしも物語のすべてが音楽に反映されているわけではないですが、絵本が音楽の世界を再現しているといっても良いでしょう。本の中にある文章、絵、音楽と出会い、親しむ方法は数限りなくあるのです。

——物語の中での音楽の役割とは？

パストール氏：音楽が、(登場人物の)感情や物語のドラマティックな流れを引き立てるように努めました。興味深いことに、この音楽は感情や人間の内面、状況を見事に描き出しています。文章だけでは物足りなかったと思います。

絵本企画のきっかけと、現代版へのアレンジ

"ここはおもちゃ箱の世界。毎日毎朝行進を続けるおもちゃの兵隊さんは、ある日可愛らしい女の子シュウシュウと出会います。二人は恋に落ちますが、「恋をした兵隊は10日間禁固の刑」を言い渡され、自由のきかない身に。さらに友人の道化師が横恋慕し、シュウシュウのハートを奪ってしまいます。さて二人はどうなる……？"

ちょっと緊張感のあるストーリー。この《おもちゃ箱》は、《子どもの領分》(1906～1908)に続き、愛娘シュウシュウのために書かれたピアノ曲である。フランス国内でもあまり知られていないこの曲を、なぜ絵本にしようと思ったのだろうか。この企画を提案したのは、ホルン奏者ダヴィッド・パストール氏が率いるアンサンブル・アゴラ (Ensemble Agora)。リヨン国立オペラ座 (Opéra National de Lyon) オーケストラ所属メンバーが中心となっている。企画・音楽担当のパストール氏にお話を伺った。



「この曲は子どもが聴くのに適していますし、全編 35～40 分なので、子ども向けのコンサートにもちょうど良い長さです。以前アンサンブル・アゴラで《子どもの領分》をオーケストレーションした経験があったので、この《おもちゃ箱》ピアノ譜も、アンサンブル用にオーケストレーションできるのでは、と考えたのです。そして絵本出版社ディディエ・ジュネス社に、この音楽で何かしたいと提案しました。

ドビュッシーの友人アンドレ・カプレ (André Caplet) が完成させたオーケストラ譜もありますが、なぜピアノ譜を使用したかという、音色、色彩をどんどん広げていくことができるからです。フルート (ピッコロ、バス)、バス・クラリネット、オーボエ、イングリッシュホルン、ファゴット、ハープが使われています」。

※オーケストレーション担当は、ファブリス・ピエール氏 (M.Fabrice Pierre)。

ディディエ・ジュネス社では 1988 年より子ども用の絵本出版を始め、現在は音楽 CD 付の絵本も多く出版している。今回の提案について、編集側ではどのような対応をしたのだろうか？ディレクターのミッシェル・モローさんが答えて下さった。

「ドビュッシー原作のストーリーが少し時代遅れな感じで、タイトルにある "joujoux (おもちゃ)" も 19 世紀的な古い単語でしたので、現代の感覚に合うように書き直す必要がありました。そこで作家のラスカル氏 (Rascal) に、新しいストーリーを作ってもらおうよう依頼しました。完成するまでいろいろ話し合いましたね。おもちゃの兵隊さんや道化師 (あやつり人形) 等の登場人物は全て原作通りですが、内容はだいぶ異なります。街全体がもっと生き生きと活気づいた感じになりました」。

感情豊かにストーリーを語るのは、有名オペラ歌手

2 年の製作期間を経て、2005 年に出版された『おもちゃ箱』(1 万刷)。CD はドビュッシーの音楽に合わせて、ナレーションも入っている。ナレーターはオペラ歌手としてフランス国内外で活躍中のナタリー・デセイさん (Natalie Dessay) だ。

「デセイさんにはこの事務所に 2 回足を運んでもらい、ピアノの録音を聞きながら文章を読んでもらいました。私がそれを聞きながら、ストーリーと音楽が合うように微調整をしていきました。ラスカル氏に「この部分をもう少し短い文章にできるかしら？」等と相談しながらね。とても面白い作業でした！結果として、ストーリーと音楽を上手く合わせる事ができたと思います」とモローさん。

ナレーションには、登場人物の性格や、状況の展開がはっきりと分かるように、表情豊かな声が欠かせない。そこはオペラ歌手、さすが声色を使い分ける名手である。ちなみにシュウシュウの声色はすぐに決まり、道化師は色々なバージョンを試した結果、昔のパリジャンのような声に。その他、もったいぶった市長など、個性的な人物が次々登場する。ちなみにデセイさん自身も小さい頃に、物語付きの音楽を聴いていたそうだ。

モローさんによると、「俳優がクラシック音楽と一緒に物語を語るのは、フランスで長く伝わる伝統です。ジャン・コクトー (Jean Cocteau)、ジェラルド・フィリップ (Gerard Philipe)、ジャン・ロシュフォール (Jean Rochefort) 等、多くの俳優が朗読しています。プロコフィエフの《ピーターと狼》等が人気で、著名な俳優は毎年必ず上演するんです」。

確かに、日本の落語 CD のように、フランスでは朗読を吹き込んだ CD がよく売られている。クラシック音楽と物語の朗読という組み合わせも多い。純粋に音楽だけを聴くべきという意見もあるかもしれないが、音楽と物語を結びつける試みに関して、音楽家はどのように考えているのだろうか？パストール氏の意見はポジティブだ。

「『おもちゃ箱』のストーリーが面白そうだから買おうかしら。あら、音楽もいいじゃない」というお客さんもいるでしょう。音楽だけだったら、買わないかもしれません。そう考えると、フランス国内だけでも、この CD が 1 万枚出回っているという事実は大きいですね。ディディエ・ジュネス社はクラシック音楽普及にも一躍買っていて、絵本のイラストやストーリーによって、音楽を聴く行為をサポートしてくれています。〈音楽+物語〉というスタイルは、ひとつの提案なんです」。

物語、絵、音楽——子どもはどこに反応する？

では、『おもちゃ箱』を聞いた子ども達は、どのような印象を持ったのだろうか？
ふたりのお子さん（3歳と6歳の男の子）がいるパストール氏にお伺いした。

「初めて子ども達がこの絵本を読んだ時、まず冒頭のメロディーに反応していましたね。それから、道化師がシュウシュウに告白した後、“私、あなたのことも好きよ。でも弟みたいに思ってるの……”と言われるところが好きようです。本当に理解できたかどうか分かりませんが、何か違いを感じるみたいですね。特に6歳の子は。デセイさんはこの部分を特別な声色で語っているので、子どもには分かるようです」。

物語の世界にどんどん入り込む子ども達。では音楽はどのような効果を添えているのだろうか？

「短いメロディーが多様に変化しながら続き、フィーリングもそれに伴ってさまざまに変化しながらストーリーが進んでいきます。イングリッシュ・ホルンのソロは3箇所あり、とても静かなのですが、ストーリーの中でも重要な部分を占めています。例えば兵隊が24時間だけ自由を認められ、喜び勇んでシュウシュウに会いに行く途中、噴水の水面に顔を映して身なりを整える場面があります。音楽が人間の心情や感情、状況を、実によく描き出しているのが興味深いですね」。

喜びの瞬間を前に、早まる気持ちを抑えて少し冷静になる一瞬。そんな一言では言い表せない心情を、音楽が代弁しているようである。さらにパストール氏によると、この音楽は全編を通して面白い仕掛けがあるそうだ。

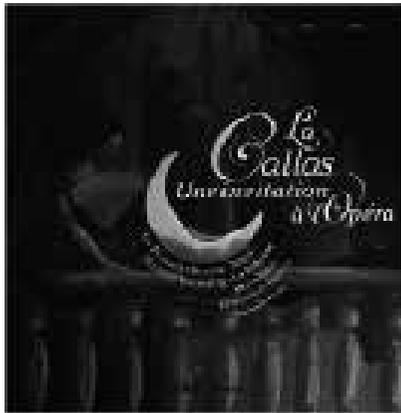
「ドビュッシーは、フランスで昔から伝わるシャンソンの子守唄《フェ・ドウドウ (fais dodo)》を引用しています。ただ唄をそのまま引用するのではなく、デッサンのようにさっと用いています。また場面によって、長調と短調を使い分けています。親御さんが子どもと一緒に CD を聞いている時、かつて自分が幼少時代に聞いたシャンソンの一節が出てくると、“あ、これはあのフレーズ！”と気づくのですね。そういう意味で、『おもちゃ箱』はさまざまな音楽のレファレンス、としても面白いと思います」。

子どもだけでなく、大人の共感と関心と呼ぶツカミも、ドビュッシーは意識していたのである。まさに、家族で楽しめる音楽絵本なのだ。

子どもに語りたいストーリーとは？

さてハッピーエンドの物語が多くある一方で、「子どもに悲劇を語ってもいいのだろうか？」というのも、ひとつの大きなテーマである。

編集長モローさんは、『マリア・カラス オペラへのご招待 (La Callas, une invitation à l'opera)』という絵本も手がけている。ここに登場するオペラは、《トスカ》《椿姫》《ノルマ》《蝶々夫人》《ラ・ボエーム》



と、すべて悲劇だ。

「オペラの内容を、リアルなストーリーとして語る絵本を作りました。これは私のアイデアです。こうした物語を子どもに語ってもいいと思うんですね。でも全て悲劇なので、最初は受け入れてもらえるか心配しました。ソフトな印象になるように、一部編集はしてあります。例えば、《ノルマ》では主人公ノルマが自分の子に殺意を抱いているのですが、その部分はカットしました。でも、全体のメッセージは明確に伝わっていると思います。子どもは感性が豊かなんですね。絵本を読んだ友人のお嬢さんが、「ストーリーがすごく面白かった！」と言ってくれたそうです。物語と絵がとても気に入ったみたいで、

むしろカラスの歌に関しては“うん、良かったよ”という感じでしたけど（笑）。この感想を頂いて、とても誇りに思っています」。

悲劇だからといって語るのを避けず、リアリティを大切にします。そこに、モローさんの強い信念が伺える。この絵本は8歳以上の子を対象としているが、大人でも楽しめる内容で、ストーリーとイラスト、そしてマリア・カラスの声が見事に溶け合っている。絵本を開いた瞬間、その世界の中に入り込むことができるだろう。

「絵本が音楽の世界を再現している、といっても良いでしょう。文章、絵、音楽——どこから入っても良いし、楽しみ方は数限りなくあるのです」。

絵本の読者とコンサートで会うこと

物語だけではなく、音楽が付いている醍醐味は、実際のライブ・コンサートで絵本の世界を再現できることだ。パストール氏は、コンサートで絵本の読者と会えるのを楽しみにしている。

『おもちゃ箱』はパリ市内の国立オペラ＝コミック劇場（Théâtre National de l'Opéra-Comique）で、昨年クリスマスに3回コンサートをしました。約3千人が集まり、会場は満席になりました。デセイさんの語りも魅力的で、絵をプロジェクターで映し出したり、大好評でした。絵本を読むだけの方も多いでしょけれど、少しずつコンサートに足を運んでいただけるようになってきているかもしれません。次のプロジェクトは、声を失った人魚のお話『小さな人魚姫（La Petit Serène）』です。すでに朗読、演奏の録音は完了し、これからストーリーに沿って繋げていく段階です。2009年クリスマスには『おもちゃ箱』と一緒に、リヨン国立オペラ座にて子どもフェスティバル期間中に演奏する予定です」。

次の絵本完成まであと一息、モローさんの仕事も大詰めだ。

『人魚姫』もナタリー・デセイさんが朗読担当なのですが、特に魔女がとんでもなく憎らしい声で（笑）。人魚はとてもピュアで印象的な声です」。

ちなみにモローさんは名門グランゼコールで商業を学んだ他、歌を10年間習っていたそう。その絶妙なバランス感覚を生かして、物語と音楽をつなげる橋渡し役となっている。そして現在大学生のお嬢さんは、某ラジオ局の子ども用クラシック音楽プログラム編成でスタージュ（研修）中。母親と似たような道を辿っている。

今後、どんな音楽絵本が登場するだろうか？ますます目が離せない。

* インタビュー動画 URL：（モローさん） <http://jp.youtube.com/watch?v=5qST9sk-Ai8>
（バストール氏） <http://jp.youtube.com/watch?v=urNgg5fxv0>

イマジネーションが広がる！絵本の出版社
〈ディディエ・ジュネス社 Didier Jeunesse〉
8 rue d'Assas 75006 Paris
Tel: (0)1 49 54 48 30
Fax: (0)1 49 54 48 31
contact@didierjeunesse.com
<http://www.didierjeunesse.com>

※音楽CD付絵本は、『魔笛』（モーツァルト）、『ピーターと狼』（プロコフィエフ）、『ロミオとジュリエット』（プロコフィエフ）、『ムッシュ・サティ—頭の中に小さなピアノを持つ男（Monsieur Satie, l'homme qui avait un petit piano dans la tête）』（エリック・サティ）等。同社ホームページで一部試聴できます。

〈国際室内楽コンクール〉

ダヴィッド・バストール氏が主宰する国際室内楽コンクール。毎年4月リヨン市で開催される。2007年のピアノ&ヴァイオリン部門では、野平一郎氏も審査員に。2009年以降の開催予定は、弦楽四重奏（2009）、ピアノトリオ（2010）、金管五重奏（2011）、ピアノ&声楽（2012）。ご興味のある方は、下記へ直接お問い合わせ下さい。

Concours International de Musique de Chambre BP 2209
69214 Lyon cedex 02
Tel: (0)4 72 41 83 30
Fax: (0)4 72 41 83 30
cimcl@free.fr
<http://www.cimcl.fr>（仏・英）

第3回 フェット・ドウ・ラ・ミュージック～音楽と戯れる1日

※ 2008年7月4日掲載分



6月21日は「音楽の祭日」。この日は日照時間が一番長い夏至の日にあたり、これを境に、暦の上でも夏に入る。全ての公共施設、道路が無料開放され、あらゆる世代・年齢・国籍の人が、プロ・アマ問わず、演奏者または聴衆として、さまざまなジャンルの音楽に触れることができる。

このフェスティバルは1980年代のミッテラン政権下、当時文化大臣であったジャック・ラング（Jack Lang、現社会党）と、音楽・舞踊部門ディレクターのモーリス・フルーレ（Maurice Fleuret）が1982年に始めたものである。当時の調査によれば、子どもの2人に1人が楽器を習っているにもかかわらず、「音楽は至るところにあるのに、演奏の場がない」というフルーレ氏の問題提起を受け、「アマチュアにもプロと同じく、演奏の場を提供しよう。クラシック、ロック、ジャズ、合唱、伝統音楽、世界の民謡、全てのジャンルを取り込もう」と大胆な計画が打ち立てられたのである。その後、音楽界の潮流の変化に伴い、ワールド・ミュージック、ラップ、テクノなど、新しいジャンルの音楽も次々取り入れられていった。まさに、音楽にはヒエラルキーが存在しないことを体感する日ともいえる。

小学校の合唱発表会、「ギリシャ神話」をテーマに自分たちで作詞

さてこの日の午前中、ある小学校の合唱発表会へお邪魔した。1年前にできたばかりのこの新しい小学校は、半地下階に小さなホールがあり、大きなカーブを描いたガラス窓から光が差し込み、明るく開放的だ。見学したのは、小学校1・2年生合同クラス。

この日のために子ども達が練習してきたのは、フランスのシャンソン4曲である。《ママドウ、カシミール、タンタン（Mamadou, Casimir et Tintin）》、《うちのロバさん（Mon ane）》、《やさしい歌（Une chanson douce）》、《ラ・ソシエール・グラブイヤ（La sorciere Grabouilla）》と、最後は自分たちで作詞した1曲。

入場行進の前、隣の部屋で「おー！」という気合を入れる声に続いて、約35人の小さな合唱団が登場！先生の身振りの大きな指揮にしたがって、身体でリズムを刻みながら歌ったり、ノリノリの子がいたり、ちょっとはにかみながら歌う子がいたり。とても元気な歌声に、保護者の表情もつい緩む。まだ幼稚園くらいの小さな子が、「あたしも歌いたい！」と客席でお母さんの袖をひっばっていた。3曲目では、魔法使いの格好をした子2人が前に出てきて、歌詞に合わせて面白いポーズをする。もう2人は、ミニ・ドラムでタッカタカタカ……とリズムを取る。とても楽しい曲で会場が沸いた。

そして最後の曲《アテナ（ATHENA）》になると、子どもたちの声がひととき大きくなった。「昔むかし、あるところにアテナという女神がいました……」という歌詞で始まる。実はこの曲、学校で習ったギリシャ神話をもとに、子ども達が自分たちでアイデアを出し合って約3ヶ月かけて創り上げた歌なのだ。そこにお母様のひとりが音楽をつけ、ギターで伴奏し、とても雰囲気ある1曲に仕上がった。自分たちが作った歌を合唱する嬉しさと、歌にこめられた皆の愛情が伝わってきた。ある子は、お風呂の中でもこの歌をずっと口ずさんでいたそうだ。録音されたCDは、この夏の思い出とともに、子どもたちの一生の宝物になるだろう。この作詞プロジェクトについては、第4回で紹介したいと思う。（→p.13）

音楽に溢れかえる街

小学校を後にして街中に出ると、ガラガラした日差しが目に飛び込んでくる。「そうか、今日から夏なんだ……！」そんな暑さもお構いなく、街中では至るところでミュージシャンが楽器を鳴らしながらステージ・セッティングをし、観客が周りを少しずつ取り囲みながら、開演の時を待っている。



メトロに乗ってパリ 20 区に移動。シテ・ドウ・ラ・ミュージック (Cité de la Musique) (→ p.2) では、外に子ども用のトランポリンが置かれていて、たくさんの子どもがぼんぼん跳ねて遊んでいた。館内では、ロック、ジャズ、クラシック等、コンサートが 1 時間毎に楽しめる。子ども向けのロックコンサートに顔を出すと、「みんな、楽しんでる？」という歌手の掛け声に、「ウィー！」と子どもたちの元気な声が聞こえた。このコンサートは、いつ入っても、いつ出ても OK。しかも、全て無料なのだ。他にもスティール・ドラムやガムランを弾くアトリエなど、楽器に実際に触れて楽しむコーナーもあった。

ガラス・ピラミッドの下で、チャイコフスキーを聴く

さてこの日はパリ・ルーブル美術館でも、フェット・ドウ・ラ・ミュージック (Fête de la Musique) 特別企画として、パリ管弦楽団によるコンサートが開かれた。



21 時 20 分、ガラスのピラミッドの入り口ドアが開き、ずらっと並んだ長蛇の列が少しずつ動き出す。さすが夏至の日、まだまだ日差しは明るい。ルーブル美術館のガラス・ピラミッドの下のチケット販売ロビーは、広いホール状になっており、そこからドノン、リシュリユー、シュリー翼の 3 館へつながっている。普段は見物客でごった返すロビーも、この日はコンサートのために開け放たれたが、あっという間に 1000 人を超える聴衆で空間が埋まっていく。家族連れ、若いカップル、学生の集団、老夫婦、観光客……。筆者はドノン翼入り口付近の、ステージ全体が見える場所を確保した。

22 時、ピラミッドのガラス窓から差し込む光が少し翳ってきた頃。オーケストラに続いて、指揮者のパーヴォ・ヤルヴィが登場し、聴衆から大きな拍手と歓声上がる。ロシアの大地に響き渡るような、ホルンとファゴットのファンファーレから始まるチャイコフスキー交響曲第 4 番。雄大かつ静かな重みに満ちた音楽は、聴衆のみならず、ルーブルに眠る美術品にまで届くようである。第 2 楽章ではやや牧歌的で優しい音色の変化が、聴衆の心に染み入っていく。思わず隣で聴いていた人と、目を合わせる。「モナリザはちょっと遠いけど、ミロのヴィーナスは聴こえているかしら」

コンサートホールの座席で聞くのとは一味違い、美術館の床に座りながら、あるいは彫刻を横目に見ながら、あるいは隣の人と肩が触れる距離で、自分なりの姿勢と角度で音楽を聴けるのもまた面白い。

第 4 楽章で第 1 楽章冒頭のテーマが再現される頃、ガラス・ピラミッドの上をふと見上げると、美しくライトアップされたリシュリユー館が見えた。ようやく、夜の帳が下りた。そして最後の指揮棒が振り下ろされた瞬間、聴衆からは大歓声、ブラボーの嵐が沸き起こる。おそらくこの瞬間、聴衆は、ただ楽しんでいた。その場にいることを。



コンサートが終わり、熱気に包まれたガラスのピラミッドを出ると、さらっと涼しい夜風が身体を通り抜ける。噴水の水がさやさやと流れ、ほとぼりを冷ましてくれる。23時。誰も家に帰らず、子ども達はピラミッド前で走り回ったり、カップルはルーブルの噴水に腰かけてくつろいだり、友人と話に興じたり、近くのバーに繰り出したり。そう、この日は明け方まで交通機関が動いていて、レストランやバーもコンサート帰りの客を迎え入れてくれる。教会や道端では、夜更けまでコンサートが行われ、街のどこを歩いてもピーピー、プカプカと音がしていた。メ

トロに乗り込んでくる学生たちは、手に手にドラムを持ち、プラットホームでも大騒ぎ。ま、今日だけは
大目に見ようか……周りの乗客もどことなく緩やかだ。「今日は音楽と戯れる日なんだから。」

このフェット・ドウ・ラ・ミュージックは、今世界中に飛び火している。1985年以降、ヨーロッパ、南米、
アフリカ、アジアまで輸出され、現在では5大陸100ヶ国*で開催されているそうだ。

New Yearのように世界同時中継で音楽を楽しむ、そんな日も近いかもしれない。

* 日本においても「音楽の祭日」(Fête de la Musique au Japon)が2002年より開催されている。開催内容はジャンル、プロ・アマを問わない音楽家によるライブ・コンサートで、すべて入場無料とし、参加協力を得た会場で行われている。

【2011年度ホームページ】

- ・ 東京・音楽の祭日：<http://www.mediatv.ne.jp/tokyo-ongakunosaijitsu/index.html>
- ・ 第10回音楽の祭日（関西地区）：<http://www.mediatv.ne.jp/ongakunosaijitsu/>

◎学校で——

第4回 お母さまが提案した小学校の音楽ワークショップ

～アイデアを出し合って、歌を作ろう！

※ 2008年8月29日に掲載分

パリ中心部からメトロに乗って10分ほどいくと、そこは静かな住宅街。この地区にある小学校にて、6月21日音楽の祭日（フェット・ドウ・ラ・ミュージック Fête de la Musique → p.10）合唱発表会が行われました。この日は、CP、CE1（小学校1、2年生に相当）の子ども達はずっと心待ちにしていた日。なぜなら、自分たちで作詞した曲のお披露目の場だからです。曲名は《アテナ（ATHENA）》。この小学校に展示されている、ギリシャ彫刻をテーマにしています。今回は児童のお母さまのひとりで、このワークショップを企画・指導したデルフィーヌ・エリスさん（Delphine Ellis）にお話を伺いました。



ギターに合わせて《アテナ》を熱唱！

アテナ*

1: 昔むかしあるところに、アテナという女の子がいました
 かつていた小さな猫が いなくなっていました
 アテナのむすこ ユリスは悲しみました
 なぜならアルテミスと たたかいたかったから
 アテナが、猫のレグリースを殺してしまったから
 ユリスとアルテミスは 湖のちかくでたたかいました
 アルテミスはユリスをたたいて、ユリスは湖におぼれて死にました
 (※くり返し)
 アテナ、おちついて。アテナ、なかないで。
 アテナ、心配しないで。あなたの子はいきかえるから。

2: 神さまたちのことばを とどける神ヘルメス
 羽根のついたヘルメットをかぶり かなしそうに
 アテナに よくない知らせをとどけにきました
 うつくしいアテナは 泣くばかり
 そのとき ヘルメスは彼女にいました
 じかんの旅に 出ましよう
 そしていっしょに、空とぶくるまで 旅だちました

(中略：旅の途中で魔法のサーカスとすれ違い、神話の英雄にたくさん出会いました。アテナはヘルメスに「息子を生き返らせて下さい」と頼み、ヘルメスはビー玉 (ossletes) の名手である姉を紹介し、姉は魔法の薬と、死者を生き返らせる黄金の羊毛を渡してくれました)

5: 空とぶくるまは、1年まえにもどりました
 太陽のまわりを ひとまわりして
 アテナはめをさまし そらを見あげました
 泣いてばかりいたアテナは うれしくなりました
 ついにユリスを見つけました
 ユリスはまだ生きていて そのうでの中には
 ねこのレグリースがいました
 そしていっしょに しあわせにくらしました
 神さまたちに みまもられて

翻訳協力：熊川真華ちゃん (8歳)

——子ども達と一緒に作った《アテナ》の歌は、元気一杯な声が印象的でした。なぜ、ギリシャ神話をテーマにしたのでしょうか。作詞のプロセスを教えてください。

「この小学校のテラスにはギリシャ彫刻が飾られていて、子ども達は年間を通してギリシャ神話の勉強をします。そこで、歌のテーマもギリシャ神話にしました。私のほうからこの音楽ワークショップを小学校に提案し、今年1月から始めました。最初、担任の先生は皆がついてくれるか心配していたのですが、子ども達は一生懸命練習してくれて、とてもうまくいったと思います。子ども達が歌詞のアイデアをどんどん出して、担任の先生がそれをオーガナイズし、1曲にまとめてくれました。さまざまな意見が出た時は投票もしました。私は音楽のパートを担当し、リズム感のある曲に仕上げました。子ども達にリズムを感じながら歌ってほしかったんです。少し速いリズムでしたけど問題はなかった



小学校の正面

ですね。それから小さいパーカッションも入れました。あまり歌の練習時間がとれなかったので、打楽器があると歌いやすいと思ひまして。2クラス合同だったのですが、おもに年少のクラス（CP/CE1）からパーカッション奏者を選び、年長のクラス（CE1）はおもに歌詞を決めました。とてもよく分担されていたと思ひます。」

——メロディはすぐに浮かびましたか？

「そうですね、冒頭の「Il était une fois Athena, Athena（昔むかしあるところに、アテナという女の人がいました）」を聞いて、すぐにメロディのアイデアが浮かびました。あとは歌詞を微調整しながら、音楽と合わせていきました。長いフレーズの時は、（関係代名詞を入れて）文章を2つに区切ったり。速いリズムなので、歌詞も速く言わなくてはいけないし、子ども達にとっては少し難しかったようですが、一度歌ってみせると、皆すぐに覚えてくれました。昨年の経験から、全員と一緒に歌うとちょっと乱れてきれいに聞こえないので、2グループに分けて、問いと答えのようにしたいと思ひました。本当はステレオサウンド効果を出したかったんです。ただ発表会の時はグループによって声のバランスが変わるといけなないので、全員一緒に歌いました。その代わり、普通のシャンソンのように、ときどきリピートを入れて（ニュアンスを変えることで）その効果を出しました。」

——昨年も同じようなワークショップをされていたのですね。



デルフィーヌ・エリスさん

「じつは今年で2年目になります。去年は違う学校にいたのですが、年度初めに両親の職業を問われる書類があり、私も主人もミュージシャンなので、そう答えました。すると子どもの担任の先生から連絡があり、「子ども達が興味を持つようなワークショップをやってもらえませんか？」と相談に来られたのです。私は即座に「ぜひ」と答えました。（注：フランスでは市町村によって、音楽の授業がない小学校があります）

幼稚園では保護者が教室に入って子ども達の様子を見ることができですが、小学校にあがると保護者は中に入ることができません。ですが、担任の先生が勧めて下さったおかげで、私は中に入ってクラスの様子を見て、直接子ども達と接することができました。皆たくさん練習してくれましたし、先生も大変協力的でした。」

——昨年はどのような音楽だったのでしょうか？

「《おながくの海*（La Mer Musicale）》というシャンソンで、小さなイルカが見失った弟を探しに行くというストーリーです。こちらも、子ども達が内容を決めました。子ども達は本当に色んなアイデアを持っていますね。クラスに16カ国の国籍の子25人が集まっていたので、イルカがそれぞれの国を廻るというストーリーにしました。もちろん海のない国もありますけども。一人ひとりその子の国の物語を少しずつ話すのですが、どんどん長くなり、結局15分（！）の曲になりました。ほとんどフランス語ですが、例えば中国の物語では、少し中国語を混ぜたり。子ども達がストーリーを考えて、先生が航路を決めてくれました。音楽は今年のリズミカルな曲とは対照的で、物語を語るために静かなメロディーにしてあります。」

——1クラスに16カ国とは驚き！です。でも、その多様性をうまく生かした音楽にされていますね。ところで、デルフィーヌさんご自身はいつ音楽を始めたのでしょうか。



小学校のテラスに飾ってあるギリシャ彫刻。ルーブル美術館に展示してあるオリジナルをモデルに、現代アーティストがアレンジした作品



彫刻（アテナ）の後ろは小学校1～2年生のクラス。学校のパソコンを使って、ギリシャ神話の登場人物を調べる子ども多い

「小さい頃にピアノを習っていましたが、厳しくて途中でやめてしまいました。でも音楽は大好きで、本格的に始めたのは18歳の時です。友人と一緒にギターのグループを作りました。明日も野外でロックのライブがあるんですよ（掲載時には終了）。私の子どもは今6歳半と8歳ですが、二人ともピアノとソルフェージュ、ギターを習っています。音楽は大好きで、よく聴いたり、歌っています。聴くのはロックやブルースが多いかしらね。」

—— デルフィーヌさんの音楽にける愛情は、子ども達に確実に伝わっていると思います。来年もぜひワークショップを続けていただきたいですね。ありがとうございました。



一人ひとり手作りのプログラム。発表会が終わった後、サプライズ！で親にプレゼント

世界の美しさと多様性を発見させること

家と庭を自由に行き来できるよう、広々と開け放たれたテラス。デルフィーヌさんのご自宅にはよく学校帰りの子ども達が集まり、ブランコで遊んだりするそうです。発表会前に行った録音の日には、集まった子ども達のためにデルフィーヌさんがチョコレートケーキを焼き、香ばしい香りがお庭まで漂っていました。



デルフィーヌさんご自宅のお庭にて

このワークショップを通して、子ども達は母国だけでなく、クラスメートの生まれ育った国々についても興味を持ち、また西洋文化の根底にあるギリシャ神話について、より親近感と情熱を持って接するようになったようです。またデルフィーヌさんが「子どもたちは本当に色々なアイデアを持っている」とおっしゃるように、身近にあるものや子ども達自身をテーマにして「歌詞を作る」という能動的な行為は、彼らの想像力を十分に引き出しました。

ではこれにはどんな意味があるのでしょうか。

元シカゴ大学心理学主任教授ミハイ・チクセントミハイは、古今東西の芸術家やノーベル賞受賞者など、世界に影響を与えた才人の創造力について、『Creativity』* に著していますが、両親の影響についてこう述べています。

子どもが、将来秀でる分野にそれほど早くから興味を示さなくても、この世界の美しさと多様性を発見させてあげることがたいへん重要です。

「世界」とは必ずしも絶対的なものではなく、周囲との関わりによって相対的に築かれていくもの。このワークショップでは、想像力を喚起するテーマの与え方、複数アイデアの効果的な結びつけによって、子ども達の世界観を大きく広げました。また音楽は、子ども達によって築かれた新しい世界に色彩を与え、全員の心をつなぐ結びつける役割を果たしたようです。

デルフィーヌさんと小学校のコラボレーションは、来年以降も大いに期待されています。

* 動画 URL : (アテナ) <http://www.youtube.com/v/bFVthOoYKHw>

(おんがくの海) <http://www.youtube.com/v/GLDt48p69ro>

*Mihaly Csikszentmihalyi : *Creativity-Flow and the Psychology of Discovery and Invention*, Harper Collins Publishers, 1996

第5回 「感」から「知」に変える音楽の聴き方～フランスの小学校で行われた実験

※ 2008年8月8日掲載分

音楽を聴いたときに感じる情動（感動）を動きで表現する——リトミックの考え方は、おもに幼児音楽教育に取りいれていると思います。今回ご紹介するのは、フランスの一般小学生を対象に行われた「音楽聴取と動きの相関性」に関する実験。身体を動かしながら音楽を聴くことで、ただリズム感や音楽性が高まるだけでなく、より高度な知覚を働かせる効果があることが分かりました。さて、それは……？



ヴァンセンヌの森 (Bois de Vincennes)：毎夏、パリ市内にあるヴァンセンヌの森でコンサートシリーズが行われる。左端にあるパビリオンが会場。この日はベートーヴェンの《月光》とリストの小品。(本文とは直接関係ありません)

一人ひとり異なる、音楽の聴き方

よく、「子どものうちから、良い音楽をたくさん聞きなさい」と言います。良い音楽は情操教育に効果がある、精神を向上させる、耳が養われる、楽器で良い音が出せるようになる等、さまざまな説があります。

では、良い音楽とは何でしょうか？誰もが美しいと認める音楽、あるいは、何度も聴いているうちにおもしろさを発見できる音楽、ある特定の状況が想起されて気分が高揚する音楽、自然に涙が出てくる曲…。

人それぞれ、音楽を聴いたときに生じる情動は異なります。例えば、「あのピアノシモに鳥肌が立った」「突き刺すようなリズムで、心臓がばくばく高鳴った」、また「自分がお花畑にいるような楽しい気分」「空を羽ばたいているような気持ち」など、子どもにもさまざまな感情レベルでのリアクションがあります。どの場合も、程度の差はありますが、音楽と自分の感情が結びついています。それは、世間的に高く評価されている音楽や演奏、といった外部による価値判断ではなく、自分自身の内にある潜在的な判断基準にゆだねられています。

音楽と感情を結びつけるために？

では音楽の聴き方によって、感情は変化するのでしょうか？またそれは、知覚にどのような影響があるのでしょうか？

フランスに、音楽の聴取と身体の動きの相関性を研究した本『Musique & Mouvement a l'école』（シモーヌ・マルク Simonne Marques 著）があります。これはパリ市内のある小学校で行った実験を基にしています。（対象は一般の小学生 100 人で、音楽経験がない子が多い）



チュイルリー公園 (Jardin des Tuileries)：広い空間で身体を動かしてみると、音楽の感じ方がちよつと変わる？

まず何もない広い空間で、小学生に音楽を2回聞かせます。音楽は、現代作曲家が実験用に書きおろした5小節のトランペット曲。1回目は座ったままで、2回目は聴きながら自由に動いてもらいます。そして聴取した後、白紙に自分の感想を書き（各10分）、その後あらためて1回目と2回目の感想の違い、つまり自分の感情にどのような変化があったかを、自分で分析して書き記します（10分）。

すると、どの児童も1回目と2回目で、驚くほどの違いが出ました。1、2回目と異なるシチュエーションを想像した子、1回目は第三者を、2回目は自分を主人公にして場面描写し

た子、2回目は細かい音やリズムまで聴きとって反応した子……、子ども達のリアクションは実にさまざまです。

下記にその一部をご紹介します。

例) ブノワ (音楽経験なし)

● 1回目と2回目の比較：イナヅマがぴかっと光った後、カミナリが落ちたように思いました。ビブレーションとゴロゴロ(うなり)がだんだん小さくなっていきました。次に自分が動いてみると、動物が獲物を待ちぶせして、その後、ビブレーションがちょっと強くなるころでは、長い1日が終わってウトウトしているのを想像しました。

例) ナタリー (音楽経験少しあり)

● 1回目 (座って聴く)：トランペットの演奏だけど、なんだか一瞬クラクションみたいに聴こえました。これはきっと、おけいこなんでしょう。私の好みとしては、この曲はあんまりきれいじゃないし、もし他の楽器もあって、おけいこでなかったら、もっとうまくいったと思うわ。どのミュージシャンも自分の長所や短所をよく聴くために、ひとりで練習するのよね。映画でみたことがあります。

● 2回目 (動きながら聴く)：曲がすすむにつれて、音楽をよく理解できたと思います。ミュージシャンの音や動きを見ながら、音楽をちゃんと追いかけることができました。自分も動いたので、音楽をよくとらえられました。音が強くなったり重くなったら腕を上げて、弱くなったり鋭くなったら腕を下げました。自分がこの音楽の中にいる、と感ずることができました。

● 1回目と2回目の比較：2つの感想を見て、こんなに意見が変わるなんて信じられない感じ。一瞬、変わった曲と思ったけど、やさしい、おだやかな感じもしました。自分が動いたので、もっと音楽の中に入っていけました。

ブノワ君の場合は、1回目と2回目で違うイメージを思い浮かべています。これは音楽から受けた刺激は同じでも、自分の中に蓄積された異なる心像(イメージ)と結びついた結果です。このように、動物や人間が登場する情景と結びつけた感想は多かったようですが、2回目のほうが登場する生き物と自分の距離が近いのが伺えます。

いっぽう、ナタリーちゃんの場合は、座ったまま聴いた1回目は、客観的に音楽を評価する内容で、やや冷静な聴き方。2回目では音楽と一体化し、メロディやフレーズ、強弱といった音楽の諸要素にもっと意識を向けています。

この児童たちの反応から、身体動作を通じて能動的に感情移入することで、音楽をよりの確に理解しようと努めていることが分かります。

筆者は同様の実験をドビュッシーのプレリュード第1巻5曲目《アナカプリの丘》でも行い、やはり同じような結論を引き出しています。児童のひとりには、「1回目は自分が音楽を"見ている"感じ、2回目は音楽に"触れている"感覚がした」と記しており、音楽が身体に内在化してきているのが分かります。



人間は数千年前から、さまざまな動きをしていた……！(ルーブル美術館/チュイルリー公園)

動きを通じて、感情から知覚へ

音、響き、フレーズ、メロディ、リズム、表現方法……、どれに反応するかは子ども次第。筆者はそれ

らをより敏感に感じとるための「動き」の重要性について、こう分析しています。

動きはアナリーゼの一手段であることが、明らかになった。心の中のイメージを意識的に参照しているか否かに関わらず、子どもは判断し、評価し、感じ取り、身体で記憶する。動きは単に、よりよく音楽を理解するための手段、というだけではなく、むしろ音がどう鳴っているのかを正確に知るための方法なのである。

(『Musique & Mouvement a l'école』)

さらに、この実験は音楽知識を問うものではないとしたうえで、「問題はどの作曲家を選ぶか、あるいはどの作品を選ぶかではなく、教育プランの水準なのである。子どもが何を聴き、知覚し、感受し、理解したか、なのだ。このように定義すると、作品や音響の選択はより広がる」と述べています。



街角音楽隊：シテ島の橋の上で、ちょっと演奏を。道行く人は足をとめて聴いたり、ミュージシャンをデッサンしたり

つまり、音楽をどう聴くかが大切であると示唆しています。なじみのない音楽や響きであれ、自分の身体をその音楽に合わせて動かすことで、耳と身体感覚を研ぎ澄ませるだけでなく、より高度な知覚の働きへとつなげることができる。自分が感じたことを紙に書きとめることも、重要なプロセスでしょう。

この実験は一般小学生を対象にしたもので、音楽を学んでいる皆さんは、もっと耳が肥えていると思います。

音楽をよりの確に理解するためのアナリーゼも重要ですが、一度鍵盤を離れ、広い空間で、音楽を聴きながら身体で思い切り表現してみるのもいいかもしれませんね。

Simonne Marques : *Musique & Mouvement a l'école*, Aix-en-Provence/Édisud, 1990

第6回 高校生はどう現代音楽と出会う？～高校生が投票する作曲家コンクール

※ 2008年11月7日掲載分

先日、あるフランス人のマダムとオーケストラの演奏会に行きました。プログラムはフランクの交響曲ニ短調、ドビュッシー交響組曲《春》、デュティユーのチェロ協奏曲《遙かなる遠い国へ》だったのですが、終演後マダムに「何が一番おもしろかったですか？」と伺うと、「私はデュティユーね。とてもリズムが新鮮だわ」とおっしゃいました。

フランスでは比較的現代曲の演奏機会が多いようです（もっともデュティユーは日本でも多く演奏されていますが）。それは、自分の耳や身体感覚に「何らかの発見をもたらしてくれる音楽」を期待している聴衆が多いことの表れかもしれません。特に現代曲を中心にしたコンサートでなくても、世界初演となる現代曲をプログラムに入れていることが時折あります。

ではフランスの子どもや学生は、現代作品とどう出会い、どのように聴いているのでしょうか？彼らの耳は、どのくらい開かれているのでしょうか？今回は「高校生と作曲家が出会うコンクール」についてご紹介します。



高校生のための作曲家グランプリ（Grand Prix Lycéen des Compositeurs）は、音楽雑誌社レトル・ドゥ・ミュージシャン社（La Lettre du Musicien）が2000年に始めたコンクールです。2008年度は、1952年以降に生まれたフランス人作曲家（あるいは正規滞在者）の作品より、2006年9月～2007年9月に発売されたCDが対象となりました。高校生が候補6作品を聴き、アナリーゼし、各作品にコメントをつけた上で、グランプリにふさわしい1名を投票するシステム。2008年度は96校約200クラスが参加し、投票した学生は約4,500名に達しました。

〈2008年度候補作品〉

- ・アラン・セロ（Alain Celso）：砂漠地帯（Espaces desertique）
- ・ブルーノ・マントヴァーニ（Bruno Mantovani）：無の時代（L'Ere de rien）
- ・フロランティーヌ・ミュルサン（Florentine Mulsant）：チェロ・ソナタ（Sonate pour violoncelle en trois mouvements）
- ・コリン・ロシュ（Colin Roche）：空に浮かぶ新しい工場（La nouvelle Fabrique du ciel）
- ・オスカー・ストラスノイ（Oscar Strasnoy）：結婚式の準備（Préparatifs de noce (avec B et K)）
- ・パスカル・ザヴァロ（Pascal Zavaro）：シリコン・ミュージック（Silicon Music）

投票後に、各作曲家は参加高校をまわり、自分の作品について話す機会をもてるのが特徴です。2008年度第1位を獲得したパスカル・ザヴァロ氏は、「高校生の学生さん達と、とても良い出会いができました。彼らはとても熱心で、研ぎ澄まされた耳をもっています。グランプリ大会を通して、学生だけでなく高校の先生方も、さまざまな現代音楽を知る機会がもてたことに、意義があったと思います。」

では実際、どんな様子だったのでしょうか、レトル・ドゥ・ミュージシャン誌記事よりご紹介します（抄訳）。

〈総評〉

(前略)……現在の大半の高校生(リセエヌ)がどのような音楽環境にあるか、ちょっと説明しよう。彼らのクラシック音楽に対する概念は、ほとんど一般の人々と同じである(たとえ、選択科目で音楽を履修していても、あるいは楽器を習っている学生でも)。すなわち、論証的で、喚起力があり、語りかけ、感動を呼ぶもの。その「境界線」は20世紀初頭で引かれているようだ。平均的な高校生は、ドビュッシー、シェーンベルグ、ストラヴィンスキー、バルトーク、ブーレーズについてはあまり語らない、ということ認めざるを得ない。グランゼコールを目指すほど成績優秀で、プラトンやアリストテレス、パスカルは決して忘れない学生であっても。

彼らの両親が、いかに文化的で、クラシック音楽好きで、レコード収集家で、あるいは音楽家であっても、まるで20世紀は存在しなかったかのようだ。四世代のうち後者の二世帯は、何も知らずに過ごしてきたと言える。彼らが1日中聴いている音楽、それは例えば今回のグランプリ候補者であるコリン・ロシュヤパスカル・ザヴァロらによるクラシック現代音楽、とはおよそ関係のないものだ。

今までグランプリを獲得した作曲家たちは、リズムや拍感、調性や音色といった音楽的要素を駆使して、(高校生達と)新たな関係を築いてきた。

今回グランプリを獲得した《シリコン・ミュージック》(パスカル・ザヴァロ作曲)を例に挙げてみよう。この作品は、我々に認識できる語法を用い、聴きやすく、旋律の配置が定まっており、対照的な性格の楽章はきちんと分けられ、複雑ながらも追随しやすい音楽が展開されている。にもかかわらず、決してアカデミックではなく、ネオクラシックでもなく、先人を模倣したものでもない。様式はまさに現代的そのものである。それは、造形的かつ現代的な作曲手法、TGVやハイテク機器のようにやや冷淡な音調、エレクトロニクスの訴求、多様な音楽語法を用いるという構想、に見受けられる。

作曲家曰く、「特定のリズム形式を強調するのは、テクノ音楽の反映です。閉じられた小節線の繰り返しは、ウォーホルの絵やペレックの小説を連想させます。」

これはとても興味深い引用例である。現代小説家の中でも、ジョージ・ペレックはすんなり受け入れられているようで、物語の語り口や文章の構成は、さほど特別なものではない。しかし彼の物語は内面を深くえぐったものであり、単なるお話、ではないのだ。《シリコン・ミュージック》も同じであろう。確かに、これら実験的作品の正当性に異論はないし、この作品が高校生のための娯楽に甘んじているわけではない。

第2位はオスカー・ストラスノイの《結婚式の準備》が獲得した。そのカンタータは、《シリコン・ミュージック》とおよそかけ離れている。しかし、両者が一致している部分もある。ザヴァロの作品では、ヴァイオリンの音が一体どれなのか、シンセサイザーの音が一体どこにあるのだろうか?と疑問に思う。ストラスノイ作品はバッハの《結婚カンタータ》を引用しているが、フレーズからフレーズへ移行する時、今ストラスノイなのかバッハなのか、ふと戸惑う瞬間がある。ただあえて言うならば、2作品がこのような聴覚的效果を狙っているならば、メリットが少ないとは言えない。この2つの事例から、これらの音楽にある遊びの要素が、高校生を魅了し、興味を持たせたことは評価できる。

このように、毎年、グランプリ大会のための準備期間を通して、高校生達がこれまで想像すらしなかった音の存在を発見できたわけで、これは小さな文化革命といってもいいだろう。(ジャック・ブノアール)

〈高校生の感想〉

●このグランプリ大会は、現代音楽を知る良い方法だと思います。私達は楽器を演奏しますが、どちらかという、クラシックな傾向があります。だから(この経験は)、自分達のやり方にこだわることもできるし、変えるきっかけにもなるのです。このプロジェクトはちょっと変わってるなとも思いましたが、発見と楽しい時間をもたらしてくれたことに感謝します。またラジオ局に行けたこと、そしていろいろ質問を受けたり、質問したり・・・私達の意識は少し開かれたと思います。この体験ができて嬉しく思います。(リセ・ジャン・バティスト・コロ、サヴィニー=スール=オルジュ)

●この大会は、私達の音楽文化に良い影響をもたらしてくれました。実際、今回聴いた現代音楽は、授業中に聞いていた音楽と全く違うもので、異なる音楽を知るきっかけになりました。この作品のおかげで、音楽を注意深く聴くようになりました。さらに私達の音楽の世界を広げ、また意識を広げるきっかけにもなりました。また作曲家の

一人と会い、彼の作品をより深く理解することができたのも、とても興味深い経験でした。またこのグランプリ大会のためにパリまで行けたのも楽しかったのですが、それより、これまでに交わしたさまざまな議論の方が大切で、ためになったと思います。(リセ・ヴィクトール・マス,ニオール市)

〈第1位：パスカル・ザヴァロ作品へのコメント〉

《シリコン・ミュージック》(ヴァイオリン・ソロ、管弦&シンセサイザーのアンサンブル)

- ・エネルギー溢れる音楽で、魅力的なリズム、独創性ある音。電子音の響きと、部分的に旋律的な響きが「衝突」し、エクレクティズム(折衷主義)な印象を生み出している。だけど最後はまとまりを見せ、(作品として)成功していると思う。(リセ・カミーユ・クローデル,ヴォレアル)
- ・この音楽は喚起力があってイメージも豊かで、映画やビデオゲームのイメージにぴったり。でも、豊かなリズムも好き。響きの組み合わせとヴァイオリンの存在感、そして時代遅れなほどノスタルジックなメロディが意外だった。(リセ・アンブロワーズ・パレ,ラヴァル市)
- ・彼の才能と独創性によって、さまざまな様式とジャズ風な効果が織り交ぜられている。ミヨーの《天地創造》を思い出した。ヴァイオリン奏者の表現力豊かな演奏と、軽快かつ重々しいリズムによって、(さまざまな様式が)結び付けられている。(リセ・ドゥ・セーヴル)

〈第2位：オスカー・ストラスノイ作品へのコメント〉

《結婚式の準備》(ソプラノとカウンターテナーによるアンサンブル)

- ・この音楽の混合は、とても厄介でした。聴衆は(明らかな)変化を待っているのですが、作曲家は静かに移行させていくので、私達は畏にかけられ、戸惑われました。そしてその短いパッセージが来る度に、私達に迷いをもたらすのです。(リセ・アンドレ・モロワ,エルブフ)
- ・この音楽は、現代の造形美術家によるカラーージュを思い起こさせました。協和音と不協和音、バロックと現代の器楽編成の違いといった対照性は、とても興味深く思いました。(リセ・モンティニー・ル・ブルトヌ)

(A LETTRE DU MUSICIEN 誌より許可を得て引用)

この作曲家コンクールは音楽院を対象としたものではないため、クラシック音楽を聴いた経験のあまりない学生が多かったようですが、曲を聴き、作曲家と会い、ディスカッションする過程で、少しずつ耳が開かれていく様子が分かります。このコンクール参加を通して、「音楽をより注意深く聴くようになった」、「新しい音楽の世界を知ることができた」、という感想が多く見受けられました。何より、現在生きて活動している作曲家と交流することで、彼ら独自の世界の見方や表現力に触れたことも、新しい視点を得るきっかけになったのでしょう。

なお、高校の先生方に対する投票では、フロランティエヌ・ミュルサン作曲《チェロ・ソナタ》が第1位を獲得。これは、伝統的なクラシック音楽の様式に則った正統派の曲だそうです。

〈レトル・ドゥ・ミュージシャン社 La Lettre du Musicien〉

14 rue Violet, 75015 Paris

<http://www.la-lettre-du-musicien.com>

◎ホールで――

第7回 音楽をどう魅せる？パリ管弦楽団の子どもプログラム

※ 2008年7月11日掲載分

フランスを代表するオーケストラのひとつ、パリ管弦楽団（Orchestre de Paris、音楽監督クリストフ・エッセンバハ（当時）、以下パリ管）。今年創立40周年になる。このパリ管では、子どものための公演を年数回行っている。パリ管のシーズン・テーマである「ロシア音楽」に沿って、ロシアに関わる曲の演奏機会が多くもたれた。

その中でひととき人気があったのは、『ロシアのお人形（Poupées Rousee）』。ロシアの伝統的な入れ子式人形、「マトリョーシカ」から着想を得た物語に、ロシアの楽曲を付けたスペクタクルだ。3回の連続公演で、最終回はほぼ満席の1,500人に達した。

このスペクタクルの企画・物語執筆・選曲を担当したパリ管スタッフのひとり、エレーヌ・コジョさん（Mme.Hélène Codjo,パリ管弦楽団芸術管理部門補佐（当時）に、『ロシアのお人形』創作の経緯をお伺いした。

■エレーヌ・コジョさん（パリ管弦楽団芸術管理部門補佐）インタビュー*



「物語を書き進めると同時に、音楽を選びました。特に入れたかった曲は、ババ・ヤガ（Baba Yaga）が登場するムソルグスキー〈鶏の足の上に建つ小屋〉（《展覧会の絵》より）、ストラヴィンスキー〈王カスチェイの邪悪な踊り〉（《火の鳥》より）です。彼らは、ロシアの物語によく登場する人物なんです。それから、ロシア民話や音楽をたくさん聴いて、ヴァシリサという少女と魔法の人形の物語を書きあげました。音楽が物語をひきたてるように、また、物語が音楽をひきたてるように、物語と音楽を同時に考えました。女優（ナレーター）もよく演技してくれて、生き生きとしたリズムカルなスペクタクルになったと思います。物語は、つぎつぎに演奏される音楽を聴くための準備の役割を果たしています。子どもたちは同時に、響きも聴いていると思います。前半はオーケストラ編成が次第に大きくなっていきますが、弦楽器や管楽器をよく聴いた後で、オーケストラ全体で演奏します。それは、《熊蜂の飛行》の密集した音や打楽器の音を聴きとるのに役立っています。子どもたちはリズムにのって手をたたいたり、楽器を眺めたり、シンバルの動きに注目したり、音楽に身をゆだねていたと思います。オーケストラ奏者も子どもたちが音楽に参加してくれるのを見て、とてもうれしかったようです」。

ロシア音楽のパノラマを見せるために



"昔むかし、ロシアの皇帝（ツアー）夫妻には、ヴァシリサという名の可愛らしい娘がいました。3人は幸せに暮らしていましたが、ある日皇后が重い病にかかります。皇后は息をひきとる前に、小さな人形を娘に渡しました。「あなたが困った時、この人形に何か食べさせてあげなさい。すると、あなたの願いを叶えてくれるわ。でもよくよく考えてね。願い事は5回までだから。」

そして数年後、ヴァシリサは一人旅に出ます。森を歩いていると、いつかし日が暮れて道を見失ってしまいます。そこにはいろいろな冒険が待ち受けていました。彼女は困った状況に陥るたびに、「お人形さん、助けて。お願い！」と願い事をかけます。すると、人形は二つにぱっくり割れ、中からそれとそっくりな小さな人形が現れ、彼女の願い事を叶えてくれるのです……。

この小さな少女の冒険物語は、ロシアの雰囲気がつっぷり味わえるストーリー仕立てになっている。

「このスペクタクルを、ロシア音楽のパノラマにしたかったのです。『可愛いヴァシリサ (Vassilissa-la-très-belle)』という物語を下地に、スラブ民話から二人の人物、ババ・ヤガとカスチェイ・イモーテルを取り入れ、ひとつのストーリーにしました。そして、そのストーリーと関連性を持たせながら、ロシアのさまざまな作曲家、さまざまな様式の音楽を組み合わせました」。

マメ知識

※ババ・ヤガ (Baba Yaga)：スラブ神話に登場する魔法使い。森の奥深く、鳥の足の上に建つ家に住み、人を喰う。ムソルグスキー《展覧会の絵》に登場
 ※カスチェイ・イモーテル (Katchei l'immortel)：魔法が使える秘宝の番人。瘦せかけているが不死身。リムスキー・コルサコフや、ストラヴィンスキーの音楽等に登場する

物語に合わせて、以下の曲が演奏された。

- ・ミアスコフスキ*：弦楽四重奏第 13 番 Op.86
- ・ストラヴィンスキー：室内オーケストラのための協奏曲《ダンバートン・オークス》第 3 楽章
- ・ストラヴィンスキー：管楽器のための交響曲
- ・チャイコフスキー：弦楽セレナードハ長調 Op.48 最終楽章
- ・リムスキー＝コルサコフ：歌劇《皇帝サルタンの物語》より〈熊蜂の飛行〉〈出発〉
- ・プロコフィエフ：組曲《キージェ中尉》op.60より〈トロイカ〉
- ・ムソルグスキー：組曲《展覧会の絵》(ラヴェルによるオーケストラ版)より第 9 曲〈鶏の足の上に建つ小屋～ババ・ヤガ〉
- ・ストラヴィンスキー：《火の鳥》組曲 (1919 年版)より〈王カスチェイの邪悪な踊り〉
- ・リムスキー＝コルサコフ：《皇帝サルタンの物語》より〈3 つの奇蹟〉
- ・ムソルグスキー：組曲《展覧会の絵》より第 10 曲〈キエフの門〉

*Nikolai Miaskovski (1881～1950)

「例えば、ムソルグスキーの〈鶏の足の上に建つ小屋〉(《展覧会の絵》より)や、ストラヴィンスキーの《火の鳥》は、ババ・ヤガの住む小屋と関係があります。またリムスキー＝コルサコフの〈熊蜂の飛行〉(ヴァシリサが人形に願い事をかけ、蜂に変身して難を逃れる場面で演奏)は有名なので使ったのですが、コルサコフの歌劇の内容とも関連づけています。さらに後半に登場する、イヴァンが乗る魔法のトロイカの場面では、プロコフィエフ《キージェ中尉》の〈トロイカ〉を思いつきました。またマトリョーシカの話を着想した時、ふたつに割れて新しい人形が出てくると同時に、新しい演奏者が次々ステージに登場するようにしました。そこで、ストラヴィンスキーの 15～25 人編成の室内楽曲から、2 曲(協奏曲《ダンバートン・オークス》と、《管楽器のための交響曲》)を使うことを考えました。このように、物語の展開を考えながら音楽を組み合わせていきました」。



(c) Thierry Boccon-Gibod

お気づきの方も多いと思うが、最初は弦楽四重奏から始まり、楽器編成がだんだん増えていき、最後はフルオーケストラになる。つまりマトリョーシカがふたつに割れて数が増えるたびに演奏者が増え、音楽の規模も大きくなっていくのだ。まるで美少女ヴァシリサの冒険を、ステージにいる音楽家も一緒に応援しているかのように。物語と音楽が見事に融合してドラマティックに展開されていき、子ども達はその世界にどんどん入り込んでいく。

選曲の教育的効果とは？



(c) Thierry Boccon-Gibod

じつはこの選曲には、教育的効果も考えられている。

「音楽を選ぶ際、その（教育的）効果も考えました。例えばストラヴィンスキー《管楽器のための交響曲》には、ホルンのソロがあります。一つひとつの楽器を別々に聴いてもらうことで、オーケストラの中のさまざまな響きを発見したり、音の違いを聴いてほしかったのです。チャイコフスキーの弦楽セレナーデにも同様の効果があります」。

子ども向けのイメージを浮かべやすい標題音楽が多いのかと思うと、そうでもない。

「（登場人物の）動き、表情や状況に合わせた音楽、例えばコルサコフの《熊蜂の飛行》のように描写的な音楽も多く用いています。でもそれだけでなく、抽象的な音楽、例えばストラヴィンスキーの《管楽器のための交響曲》等も組み合わせています。子どもが本来持つ想像力を生かしたかったのです。描写的な音楽や皆によく知られている曲だけでなく、あまり、あるいはほとんど知られてない音楽を混ぜることも大切だと思います。新しい音楽を発見していくことができますね」。

コジョさんは「物語は、音楽を聴く準備としての役割を果たしている」と言う。物語のおかげで、抽象的な音楽を含め、あらゆる音楽をすんなり受け入れることができるという。

物語を通して、音楽や楽器を分かりやすく語る

ところでコジョさんは、音楽院で教育を受けたフルート奏者である。「音楽の知識があるから、選曲はそれほど難しくなかったですね」とご本人。フルートに関わる傍ら、物語の企画・執筆に並々ならぬ情熱を持ち、これまで音楽と物語を組み合わせたスペクタクルをいくつも手がけてきた。また学校用に、楽器紹介のための物語を作ったこともある。その一つが、ヴァイオリンの弦や弓の機能を分かりやすく理解させるために、魔法のヴァイオリンを主人公にした『時をさかのぼるヴァイオリン』というお話。そこに作曲家が音楽をつけたそうだ。



(c) Thierry Boccon-Gibod

コジョさんの創造力は、こうした教育の現場でも大いに発揮されている。

そして今回がオーケストラ（パリ管）との初共演。スペクタクルとして成功したのは、豊富な曲知識、オーケストラの楽器編成、脚本の書き方に精通し、それらを有機的に結びつけることができたからだろう。

さらに物語と音楽のバランスをうまくとるだけでなく、登場人物の動きにも気を配っている。子どもは主人公の行動に共感しやすいので、主人公の動きはとても大切である。

「物語を書いている時、どのように登場人物に動いてもらうか、いろいろ考えました。登場人物が誰と出会うのか、動物と話せるようにするのか、しないのか。冒険の途中ではつねに選択に迫られますが、誰かにアドバイスを求めるのか、そうではなく自分で考えるのか。全てのエレメントに根拠があり、全てが登場人物の存在理由に結びついています」。

子ども達がつ、並はずれた「聴く」能力

コジョさんご自身、幼い頃によく聞いていたのはベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番《皇帝》だそう。お母様がクラシック音楽ファンで、家には音楽が流れ、自然にヴィヴァルディ、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトなどに親しむようになったという。そして10歳から音楽院へ通い、フルートの道へ。今は尺八も愛用しているそうだ。

そこで、音楽を聴くのに適切な年齢があるのかを伺ってみた。

「音楽は、あらゆる年齢の子どもに聴かせてあげることができると思います。大人のように予備知識はありませんが、プレゼンテーション次第（で興味を持たせること）だと思います。それは、大人に対しても同じことが言えますね。全ての音楽に対して、さまざまな理解のレベルがあります。私自身は小さい頃にディスクやコンサートで音楽を聴きましたが、そのうちの何曲かに夢中になったことを覚えています。小さい子どもにとって難しすぎる音楽はなく、聴かせる曲に限界はないと思います。例えば、今回プロコフィエフの〈トロイカ〉では、子ども達が手を叩いているのを見てとても嬉しく思いました。音楽をちゃんと聴いて、感じて、リズムにノッてたんですね。」

——ちなみに今回のスペクタクルは、何歳を対象にしていますか？

「このスペクタクルは、音楽院に入れる年齢、すなわち6歳以上を対象にしています。このくらいの年齢ならば、物語に入り込めると思います。最初、ストラヴィンスキーやミアスコフスキーは子どもには少し難しいかな？と心配しましたが、うまくいったと思います。物語があるので、音楽を聞く準備ができていたのでしょう。音楽は5分以上でしたけど。3歳～4歳くらいの子も来ていましたが、話が長すぎて複雑かと思いましたが、70分間最初から最後まで興味を失わずに聞いていたようですね。子どもの並はずれた潜在能力、そして聴く力に、私は自信を持ちました」。

ところでこのスペクタクルには、ナレーターが存在も欠かせない。女優ロール・ゴージェさん (Laure Gouget) のナレーションは、声質が明るく、リズムカルで、聴衆をぐいぐい物語の世界へ引っ張っていく。

また演奏者がステージ上がるたびに、ナレーターが「さあ、今度はバリ管弦楽団の管楽器の皆さんです！」と上手に紹介していく。そして演奏者も、物語の中で小さなマトリョーシカが現れる度に、その役になってセリフを唱えるのが面白い。まさに物語と目の前のステージが一体化していた。



(c) Thierry Boccon-Gibod

音楽に境目はない

ところで、コジョさんはバリ管が提唱する“国境なきオーケストラ (Orchestre sans Frontière)”にも関わったことがある。「音楽に国境はない」を合言葉に、クラシック、エレキギター、ジャズ、タンゴ、ロック等、ジャンルを問わず演奏する子ども向けプロジェクトだ。(ディレクション：ファイサル・カルイ氏 (Fayçal Karoui))

「音楽はお互いに影響を受け合っています。20世紀初頭の作曲家はジャズに少なからず影響を受けていますし、ジャズもクラシック音楽にインスピレーションを受けて発展しました。音楽にボーダーラインはないのです。だから“国境なきオーケストラ”によるスペクタクルは、驚きの連続ですよ。例えばマーラーの交響曲の後に、イディッシュ音楽 (Yiddish) を演奏してユダヤ風の響きを入れたり。オーケストラメン

バーはさまざまな音楽に興味を持っていますし、クラシックに限定していません。これは我々パリ管独自のものだと思います」。

音楽をジャンルで分ける必要は、きっとないのだろう。そして音楽を年齢で分ける必要も、きっとないのだろう。それよりむしろ、融合すること——オーケストラにもスタッフにも、そんな信念を感じた。

最後にコジョさんより一言、

「リクエストがあれば、ピアノの物語も書きますよ！」

さて、どんなファンタジー溢れる物語になるだろうか！？

* インタビュー動画 URL : <http://jp.youtube.com/watch?v=mO5DYuyYEtU>

第8回 いろいろなリズムを体感してみよう！

～シテ・ドゥ・ラ・ミュージック子ども&ファミリー対象コンサートより

※ 2008年12月19日掲載分

11月15日(土)パリ20区にあるシテ・ドゥ・ラ・ミュージック(Cité de la Musique)にて、「Pulsez!」という子ども&ファミリー向けコンサートが行われました。Pulsez!とは、いろいろな拍子を体感してみよう!という意味。文字通り、さまざまな拍子やリズムが登場する、とても楽しいコンサートでした。約1000人のホールは、1席の残りもないほど満席でした。今回はその様子をレポートします。



次々に繰り出される、さまざまな拍子・リズム

60分のコンサートで、拍やテンポの異なる9曲が紹介されました。指揮はレ・シエクル(Orchestre Les Siècles)を率いるフランソワ＝グザヴィエ・ロート氏(Francois-Xavier Roth)、プログラム構成と司会進行は作曲家ピエール・シャルヴェ氏(Pierre Charvet)。(プログラムは右記参照)

リュリの華麗な曲で幕開け

コンサートの幕開け、まずチェロ、コントラバス奏者がステージ中央に着席します。でも……?次が出てきません。「あれ、他の演奏者は?」と思って見ていると、小さい音で「タン タタ タン タタ タン……」と2拍子のリズムを刻みながら、マラカス、タンバリン等の打楽器が一人ずつ出てきます。そしてリュリの華麗な宮廷音楽とともに、管楽器のグループがステージ袖から登場。それに続いて、11人のヴァイオリンと4人のヴィオラ奏者が、ホール後方から軽やかなステップを刻み、聴衆に視線を投げかけながら登場してきます。まるで宮廷のサロンで、軽やかに行進しながら入場する音楽隊のようです。

この演奏会のテーマは、「拍子」を身体で感じることに。まずは2拍のリズムを、リュリの曲で体験します。2拍の軽快なリズムと、風のように軽やかなフルートが心地よさをもたらしてくれます。続くテレマンは3拍子のメヌエットで、雰囲気が変わります。

3曲目に移る前に、リズムの世界の面白さを体感するため、パーカッション芸が披露されました。ステージ脇に机が4つ並べられ、パーカッション奏者4人がイスに。長い木製スプーンを両手に持ち、ふっと手を上げたと思うと、見事な腕さばきで「タカタカタカ!」と目にも止まらぬ速さでリズムを打っていきます。ちょっとコミカルな演技が笑いを誘い、会場は一気に興奮状態!なんと机の上に、水が入ったコップも置かれていました。でも、どんなに激しくリズムを打っても一滴もこぼれません、これはお見事!

リュリ：トルコ人の儀式のための行進曲
テレマン：食卓の音楽
シャルパンティエ：テ・デウム
ヴィヴァルディ：《四季》より〈夏〉
ラモー：《ダルダニユス》より〈リゴドン〉
シュトラウス：美しく青きドナウ
バーバー：弦楽のためのアダージョ
マントヴァーニ：ストリート
プーレーズ：打ち手のない槌
スペシャル・ゲスト&全員で合唱



その後、スプーンを金属鍋に持ち替え、響きの違いも楽しめる仕掛けもあり、これには子どもたちも大喜びでした。

3曲目、シャルパンティエの曲には付点のリズムが登場。《テ・デウム》は主に17世紀、戴冠式などの大行事の際に使われた賛美歌です。

4曲目は有名なヴィヴァルディ《四季》より〈夏〉です。演奏に入る前に、ヴァイオリンのソリストがゆったりしたテンポで冒頭部分を弾いてみます。「テンポが変わると、音楽も変わってしまいます。これだとちょっと感じが出ませんか？」と指揮者。その後普通のテンポで弾くと、実に生命力に溢れた「夏」が表現されました。2通りの演奏で、子どもたちにテンポの重要性を教えます。

5曲目はラモアの《リゴドン》。ルイ14世時代に流行した宮廷舞曲です。2拍子の軽快な音楽にのり、輪になって軽く飛び跳ねながら踊ります。

続いては3拍子の代表格、ワルツ。リヒャルト・シュトラウスの《美しく青きドナウ》が紹介されました。指揮者は指揮しながら後ろを振り向き、「1・2・3、1・2・3」と手でリズムを数え、子どもたちに拍の刻み方を伝えていました。

調性音楽から、無調性音楽へ

ここで一転、7曲目のパーカー《弦楽のためのアダージョ》は、拍を取るのが難しい1曲。アダージョの緩やかなメロディが、音色を変化させつつ、途切れることなく続きます。定まった拍のある音楽、ない音楽の違いは、音楽全体の印象にも大きく関わってきます。その対比がよく分かるプログラムでした。

さあ、ここでまたパーカッション芸の登場です。今度は机ではなく、パーカッション4台を自在に操ります。普通に打ち鳴らすだけでなく、強弱をつけたり、側面を打ったり、スティックをボールペン？などに持ち替えたり、指先で鳴らしたり、ドラムを持ち抱えながら底の紐をギターのようにかき鳴らしたり。ここでもコミカルな演技をしながら、打楽器のさまざまな可能性を引き出し、会場を大いに沸かせていました。前半のスプーン芸と合わせて、リズムの世界の奥深さが十分に伝わったようです。

最後の2曲は、現代作曲家マントヴァーニとブーレーズによる小品。マントヴァーニは、ニューヨークのような大都市の雑踏と騒音を表現した曲、ブーレーズは小編成でやや東洋的な響きの曲です。

調性音楽のリズム、拍、音程、テンポを聴かせた後、無調性音楽までしっかりプログラムに含めるあたりに、独創的な工夫が見られました。



(c) cité de la musique

そして、米国からスペシャル・ゲストを迎えてのラスト。ジャズ&ソウルシンガーのジョヴァンニ・フォン・エッセン氏 (Giovanni von Essen) が登場し、スティービー・ワンダーの曲をフランス語に読み替えて、全員で合唱です。こんな時は、普段よくしゃべるフランス人でも少し恥ずかしいのか、初めは声がなかなか出ません。「今日は皆ちょっとおとなしいのかしら？」の一言に、歌声が一気に大きくなりました。最後は2拍子のソウルフルな歌で締めくくり、コンサートは大盛況のうちに終わりました。

シテ・ドゥ・ラ・ミュージックでは、土曜日に教育的内容のコンサートを行っており、毎回児童や家族連れで賑わいます。またオンラインで、過去のコンサートやCD音源などが視聴可能です。ご興味のある方はぜひご覧下さい。

第9回 オーケストラによる子ども向けコンサート比較

～創意工夫に満ちたプログラムと演奏をレポート

※ 2009年1月30日掲載分

フランスでは新しい聴衆開拓を目指して、子ども&家族向け演奏会が頻繁に行われています。今回はパリ管弦楽団 (Orchestre de Paris)、レ・シエクル (Les Siècles) の演奏会をレポートします。

2楽団とも作曲家の生涯を振り返りながら、曲の紹介をするという流れ。プログラムは以下の通りです。

- ・パリ管弦楽団 ブラームス：ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲／サル・プレイエル (60分)
- ・パリ管弦楽団 ストラヴィンスキー：バレエ音楽《火の鳥》／サル・プレイエル (90分)
- ・レ・シエクル バッハの家族／サル・プレイエル (60分)



パリ管弦楽団はチェロのソリストが、レ・シエクルは作曲家&指揮者がそれぞれナレーションを担当しました。それぞれ60分・90分という時間内に、どのように展開したのでしょうか。三者三様の内容をご紹介します。

演奏者の目線で、音楽の表現力を子供に伝える～パリ管弦楽団

1) ブラームス：ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲

(クリストフ・エッセンバッハ指揮、エリック・シューマン vn、グザヴィエ・フィリップ vc) ～小学生対象

11月20日パリ管弦楽団による小学生向けのコンサートが行われました。曲目はブラームスの《ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲》。この日会場には、6～10歳の小学生1200名が招待されました。

ふだんは標題音楽や舞踊曲を使うことが多い子供向けコンサートですが、今回はブラームス。どのように子ども達に聴かせるのでしょうか？

冒頭、ソリストのチェロ奏者グザヴィエ・フィリップ氏 (Xavier Phillips) が司会を兼ねて、指揮者・ソリスト・オーケストラを紹介、続いてブラームスの人間像に迫っていきます。まず子供時代のエピソードとして、港の近くで育ったこと、父は音楽家ながら本人はほぼ独学で音楽を学んだこと、13歳の頃には家計を支えるためにカフェで演奏していたこと、等のエピソードが紹介されました。ブラームスは音楽家としての人生を、幼少の頃から運命づけられていたわけです。また54歳(1887年)に作曲されたこの二重協奏曲は、親友だったヴァイオリニスト、ヨゼフ・ヨアヒムとの3年間に及ぶ絶交を解消するために作った「仲直りの曲」。うまく友好関係を修復できた暁に、同年ヨアヒムとロベルト・ハウスマン (vc) の独奏にてケルンで初演されました。





ひととおりエピソードを紹介した後、指揮者・ソリストの役割、音楽的表現（強い、弱い等の表現）や楽曲構成（主題の提示、ハンガリー民謡の借用など）について、短い演奏を交えながら説明します。

そして最後は全体を通しての演奏。3楽章では小学生たちも参加しました。「このテーマが出てきたら、みんな手を挙げてね」という指示に、会場の全員が集中して音楽に耳を済ませます。テーマが聴こえてくると「あ、ここだ！」と張り切って手を挙げていました。小学生には音楽を身体で感じてほしい、という意図が伝わったよ

うです。

なお、この演奏会プログラムを企画したのは、チェロ奏者グザヴィエ・フィリップ氏とパリ管弦楽団スタッフ、エレヌ・コジョさん（Hélène Codjo）（→p.22）でした。

2) ストラヴィンスキー：火の鳥（ピエール・ブーレーズ指揮）～中高生対象

パリ・ルーブル美術館にて昨年11月より1ヶ月間、作曲家・指揮者ピエール・ブーレーズとの協同プロジェクト「断片（fragments）」が開催されました。これは、現代音楽と現代美術を関連づけながら、20世紀芸術をひも解く企画展です。



その一環として、ブーレーズ指揮によるストラヴィンスキー《火の鳥》のマスタークラス（12月1日サル・プレイエル）とコンサート（12月2日ルーブル美術館ピラミッド下）が行われました。マスタークラスは一般聴衆のほか、13-18歳の中高生800名でホールは満席、翌2日は前日に入りきれなかった200名の中高生を含む1000名以上の聴衆が、ガラス天井のルーブル美術館ホワイエで音楽を堪能しました。

今回は主に中高生を対象にしていたため、前述の小学生向けコンサートとは異なり、より音楽の内容に肉薄していくプログラムでした。まずスクリーンを使いながら、女性司会者が作曲の経緯やバレエの概要を説明していきます。初演当時の衣装・演出やダンサー、各楽器の役割、音楽とバレエの関係性などを説明しながら、重要なシーンを何箇所がピックアップして部分的に演奏を聴かせます。

冒頭、イワン王子がカスチェイの庭に入り込むシーンは、不気味さや不穏さを強調するような重厚な音色で始まります。火の鳥の出現や飛翔の瞬間などは、ハープ3台やフルート、ピッコロ、ピアノ、鉄琴等を使い、神々しく壮麗かつ煌びやかな火の鳥の姿を描いています。対して、カスチェイは半音階で示され、天地に轟くような轟音や重々しい音をホルンやチューバ等で、火の鳥の魔法による地獄の踊りは、ヴァイオリン等で雷鳴のように突き刺すような効果を出し、乱舞の果てに死に至る様子が表現されています。

30分ほどかけて丁寧に楽曲構成が説明された後、ブーレーズが再登場。拍手喝采を浴びながら、いよいよ全体を通しての演奏が始まりました。ブーレーズの冷静かつ調和の取れた指揮は、ストラヴィンスキーの大胆かつ緻密な表現力、奥行きある人物・場面描写、火の鳥の神秘性などを、全体構成の明晰さを失うことなく、表現していました。そしてラストは、感動的なスタンディング・オベーションで締めくくられました。

マスタークラス後には別途テレビ収録が行われ、中高生 15 人ほどがブーレーズ氏を囲み、「自分のキャリアに対してどう思いますか？」「あなたは自分を作曲家、それとも指揮者だと思いませんか？」「室内楽とオーケストラの指揮、どちらが難しいですか？」などの質疑応答が行われました。ブーレーズ氏は 1 問 1 問丁寧に答えていましたが、特に印象的だったのは子供達へのアドバイス。「自分自身の表現方法を見つけて、どんどんメッセージを発信して下さいね」。世界の第一線で活躍を続ける音楽家との交流は、子供たちにとっても忘れえぬ思い出になったことでしょう。

レパートリーの豊富さ、切り口の面白さで魅せる～レ・シエクル

古典から現代曲まで様々な時代の音楽を演奏しようと、若手音楽家を中心に結成された管弦楽団レ・シエクル (Siècle とは「世紀」の意味)。創設者はフランソワ＝グザヴィエ・ロート氏 (François-Xavier Roth)、フランス放送フィルハーモニー管弦楽団 (Orchestre philharmonique de Radio France) の準指揮者でもあります。このレ・シエクルと作曲家ピエール・シャルヴェ氏 (Pierre Charvet) のコラボレーションで、「バッハの家族 (La Famille Bach)」という演奏会が行われました (11 月 29 日午前/サル・プレイエル)

バッハ・ダイナスティともいえる一大音楽家系譜の頂点にたつ J.S. バッハ。今回は大バッハとその息たちの作品を並べながら、バッハの DNA がどのように次世代に受け継がれ、音楽史へ影響を与えたかを辿ります。

まずは大バッハのゴールドベルグ変奏曲から。この曲は不眠症に悩まされていた元ロシア大使カイザーリング伯爵 (Hermann Carl von Keyserling) が、長い夜を過ごすためバッハに作曲を依頼したもの。お抱えクラブサン奏者ゴールドベルグは、その寝室続きの間で演奏したそうです。第 1 変奏と第 30 変奏、つまり最初と最後の変奏を用いて、バッハがテーマをいかに発展させたかを浮き彫りにします。第 30 変奏には当時流行したシャンソン(野菜がテーマの歌!) 2 曲が対位法で登場し、主旋律に重なり合います。バッハ独特のユーモアや豊かな想像力が、手に取るように見えてきますね。

バッハの子息には、ウィルヘルム・フリードマン (Wilhelm Friedemann)、カール・フィリップ・エマニュエル (Carl Philipp Emanuel)、ヨハン・クリストフ・フリードリヒ (Johann Christoph Friedrich)、ヨハン・クリスチャン (Johann Christian) などがいますが、それぞれバロックの次に到来する古典派、ロマン派への架け橋となるような音楽を書いています。中でも長男ウィルヘルム・フリードマンは特に才能があり、美しいクラブサンの曲を残しています (《2 本のフルートと通奏低音のためのトリオソナタ イ短調 Falck 49》)。

よく知られているカール・フィリップ・エマニュエル (C.P.E. Bach) は、父 J.S. バッハと、古典派ハイドンやモーツァルト等の間をつなぐ存在でした。また主にロンドンで活躍したヨハン・クリスチャンは、幼年時代のモーツァルトに影響を与えたとされています。それぞれの音楽に流れる流麗で品の良い旋律は、確かにバッハの遺伝子を受け継ぎつつも、それに甘んじることなく、次世代につながる新規性を有しています。

コンサートの見せ場のひとつは、J.S. バッハ《フーガの技法 BWV1080》。オルガンではなく、アコーディオンを使って演奏されました。4 声が複雑に絡み合う対位法を、アコーディオン 1 台で表現していたのは実に見事でした。(演奏者はエロディ・スーラル Elodie Soulard)

そして最後は、J.S. バッハの《前奏曲とフーガ変ロ長調 BWV544》に合わせて、全員で合唱! 歌詞はこの演奏会のために書き下ろされたもので、とてもユーモラスでした。

隣の席で聴いていた少年アントワーヌ君 (7 歳) に演奏会の感想を聞くと、「Bien! (良かった!)」とにっこり。アコーディオンの独奏では、立って身を乗り出して聴いていたのが印象的でした。一台の楽器から

子どもはどこで音楽とふれあう？～芸術的刺激に満ちた環境づくり ホールで

いろいろな音と旋律が出てくることに驚いたようです。今は音楽院で基礎を習っているそうです。

*フランスの音楽院では、楽器演習の前に1～2年間の基礎課程があります。

「子ども達が音楽を好きになってくれるように」との願いを込めた、各オーケストラや音楽家のプロジェクト。今年も多くの演奏会が予定されています。また機会があればリポートしたいと思います。

パリ管弦楽団：<http://www.orchestredeparis.com/>

レ・シエクル：<http://www.lessiecles.com/>

フランク＝グザヴィエ・ロート ホームページ：http://www.francoisxavierroth.fr/francoisxavierroth_en.html

ピエール・シャルヴェ ホームページ：<http://www.pierre-charvet.com/>

3. 子どもはどう音楽を学ぶ？——自分の視点で音楽にアプローチ

第10回 生きた音楽で学ぶ、新しいソルフェージュ

～耳を開き、感覚を開き、文化への興味を拓く

※ 2009年1月9日掲載分

フランスで従来ソルフェージュと呼ばれていた音楽基礎教育は、現在フォルマシオン・ミュージカル (Formation Musicale) と改められ、実際の音楽を使いながら幅広い基礎素養の習得を目指す、音楽的实践に即した内容へと変化しています。

そんな中、『ディクテ・オン・ミュージック (La Dictée en Musique)』という教材が刊行され (2003年～)、現在フランス国内外で広まりつつあります。これはテクニック重視の従来型ソルフェージュと異なり、本物の音楽で音程やリズム、ハーモニー等を聴き取る能力を身につける方法です。



メニュー氏 (左) とシェペロフ氏 (右)

今回はその著者である2人の作曲家、ブノワ・メニュー (Benoit Menu)、ピエール・シェペロフ (Pierre Chépelev) 両氏にお話を伺いました。

幅広い選曲～中世から現代、ジャズ、アフリカ民謡、日本の伝統音楽まで

——まず「生きた音楽の中で聴音を学ぶ」という点に共感しました。ディクテ (聴音) の方法はユニークで実践的、何より音楽性を高めることが重視されていますね。それだけでなく、とにかく幅広い選曲に驚いたのですが、様々な時代・様式の音楽を聴いてみるという点でも大変耳を刺激されます。まずはなぜこの教材を発案されたのか、経緯を教えてください。

ピエール・シェペロフ氏 (以下C) : フランスの音楽教育において、ディクテはとても大事です。従来ピアノを使ったエクササイズが多かったのですが、一部の学生はそれに慣れてしまい、ピアノの音なしでは聴き取れなくなってしまいます。もちろんピアノは大事ですが。そこで、さまざまな楽器の音色が聴けて、かつ幅広い時代・様式の曲を使ったエクササイズにしました。この音源があれば、家に帰って復習することもできます。

ブノワ・メニュー氏 (以下M) : この教材はすべての時代・様式をカバーしています。古典やロマン派だけではなく、中世、現代曲、ジャズ、フォークロア、アフリカの民族音楽、日本、中国の伝統音楽など。それには、「子どもたちにさまざまな文化を理解してほしい」という理念があります。ひとつの楽器の世界に閉じこめるメソッドではなく、外に開くメソッドなのです。

制作に際しては、とにかく多くの音楽を聴き、図書館で楽譜を探しました。構成に時間はかかりましたが、幅広い選曲ができ、本来のアイデアが実現できたと思います。2002年に着手したので今年で7年目になりますね (1巻目は2003年に出版)。

教材の紹介

実際の音楽を聴いて譜例を見ながら、「リズム」「メロディ」「ハーモニー」「響き」を総合的に学んでいく教材。

譜例の一部がマスキングされていて、そこに聴き取った音やリズム、和音記号を書き取っていく。例えば「メロディ」では、譜例にリズムが記載されており、CDを聴きながら音程を記入していく。「リズム」では音程が示されているので、聴き取ったリズムを書き込んでいく。「ハーモニー」はカデンツや和音記号を書き込む。「響き」の項目では楽器名を当てる。

レパートリーは、中世の教会音楽・ミサ曲から、バロック、古典、ロマン派、近現代、無調性音楽、ジャズ、アフリカ民謡、中国・日本の伝統音楽までと、大変幅広い。またソロ曲、管弦楽曲、交響曲、協奏曲、歌曲、オペラ等、

ほぼすべてのジャンルを網羅している。1巻37曲分～6巻70曲分のエクストラクトが収録されている。例えば「響き」では、グリーグ《パール・ギュント》やベートーヴェン《エグmont序曲》(2巻)、モーツァルトの交響曲、ドビュッシー《海》《牧神の午後の前奏曲》、リムスキー・コルサコフ《シェヘラザード》(6巻)等のエクストラクトが使われている。楽しみながら高度な聴音能力を身につけることができる。現在1～6巻まで刊行。



本物の音楽を使って、聴き取りのトレーニング～ with Music !

——2003年に出版された第1巻、これはどのような生徒を対象としているのでしょうか？

C: フランスの音楽教育システムでは、だいたい6～7歳から音楽を始めます。1巻はそのくらいの子を対象にしています。1巻を始める前に、1～数ヶ月の教育は必要かもしれませんが、少しの基礎があれば十分取り組めると思います。趣味で音楽を始めた大人の方や、音楽教育を受けたことのない方にも対応しています。

——1巻からポリフォニーが出てきますが、小さい子どもでも聞き分けることができますか？

C: 最初は難しいかもしれませんが、早くから経験をするのが大切です。小さい頃から始めていれば、徐々に複数の声部を聞き分けることができます。

M: 中世から近代までのポリフォニー音楽を沢山聴いて、多声を聞き分ける感覚をつかんでほしいですね。始めの段階から、このような多声音楽をステレオサウンドで聴いてもらえれば必ず効果があると思います。やはり本当の音楽の中で学んでほしいです。だからタイトルは"La Dictée en Musique"、つまり、Dictée "WITH Music", "IN Music" なんですよ。

C: 単にピアノの譜例が何小節か書かれているだけの教材には、子どもたちはあまり興味を示しません。今の若い世代には、「これをやりなさい」ではなく、今自分がやっていることを正当化することが大事。これは新世代の特徴ですが、先生がきちんと理由を説明して納得した上で、楽しいと感じさせることができれば、子どもはちゃんと取り組んでくれます。結果が出て、しかも音楽が楽しめるエクササイズなので、「1つだけでじゃなくて、2つ、3つ、もっともっと質問して!」と、段々ノッてきます。

第1巻「メロディ」より、一部曲目紹介

(メロディ：譜例にリズムのみ提示されており、CDで実際の音楽を聴きながら、音程を書き取っていくエクササイズ)

- ・ヒルデガルド・ド・ピンゲン (1098-1179)
《おお、青々とした小枝よ (O Viridissima Virga)》
- ・メンデルスゾーン (1809-1847)
《巡礼者の格言 (Pilgerspruch)》
- ・シュトラウス (1825-1899)
《皇帝円舞曲 (Kaiserwaltzer)》
- ・スメタナ (1824-1884) 《モルダウ》
- ・リムスキー・コルサコフ (1844-1908) 《ロシアの復活祭 (La Grande Paque Russe)》
- ・ドビュッシー (1862-1918) 《沈める寺》



- ・グラナドス (1867-1916)
《詩的な情景第1集》より《ばらの踊り (Danza de la Rosa)》
- ・ショリス (1980-) 《パルティータ》
- ・ギニア民謡 《Kuku》 ほか

——ところでこの膨大な音源の中から、どのように曲を組み合わせていったのでしょうか？

M: とてもシンプルなプランに添っています(笑)。まずレベル(1～6)と音楽的要素(リズム、メロディ、ハーモニー、響き)に分け、第1巻は全音符、二分音符、四分音符、八分音符だけの曲を選びました。そうやって6巻までさまざまな時代・様式・テンポの音楽を選んでいきます。

C: 時代様式のバランスだけでなく、各章のバランスも考えました。とにかくさまざまな音楽を幅広く探して、すべてのバロメーターにフィットするように選曲しています。

オリジナルを聴かせる～原語の歌曲も多く取り入れて

——特に1巻は歌曲や合唱曲の聴き取りが多いですね。日本と中国の童謡《うさぎ》が掲載されていますが、発音、リズム、抑揚、音楽表現に明らかな違いがありました。各国の音楽文化を比較することもできますね。

C: これは確かに新しい方法ですね。これまでのフランスの音楽教育は楽器演習が多く、歌曲は少なかったんです。将来的には、もっと合唱やオルガンを増やしていくことが必要だと考えています。声が一番重要な楽器ですから。

M: 歌はとても大事です！思考や身体でとらえた感覚は、声に反映されて出てきますから。それに英語やドイツ語、ロシア語の歌曲などは、外国語を勉強する一歩になりますし、(言語に対する)感覚も養われます。CDで原語の歌を聴き、教材に掲載してある訳文で意味を理解してもらいます。各言語の音やリズムがつかめるようになるのと同時に、音楽のフレーズやニュアンスも感じ取ることができます。原語の歌曲を多く入れたのは、音楽的な判断です。

C: 音楽に表現されている心情や、詩情性を理解することも大事です。従来のソルフェージュ教材には、音符やメロディだけで歌詞がありませんでした。音やリズムを単に聴き取るだけの教育は、19世紀はよかったかもしれませんが、今の子ども達に合うような現代性もほしい。ハーモニーや楽器の響きを聴いたり、和音を覚えたり。この教材に書かれてあること以上に、学べることは多くあります。

M: 子どもはエクササイズを通して、単にリズムを学ぶだけじゃないんです。その後で歌ったり、楽器を弾いたり、他の子と一緒に演奏をしたり。何よりも「音楽ありき」です。インテリジェンスのある先生は、教材からいろいろなものを取り出せると思います。例えばもしギイ・ロパルツ(Joseph-Guy Roparz)の音源を聴きたいと思ったら、冒頭の索引から情報を検索できるようになっています。そうやって、(音楽との)コミュニケーション力を成長させるきっかけになりますね。

子ども時代に受けたソルフェージュ教育と今の違いは

——ところで、ご自身はどのような音楽教育を受けてこられたのでしょうか？ソルフェージュの重要性は、どこでお感じになりましたか？

♪「メロディ」問題：

サン・サーンズ《動物のカーニバル》(第1巻より)



♪「リズム」問題：

ブラームス《子守唄》(第1巻より)



C: 4歳からヴァイオリンから始め、合唱隊に入ってオルガンを始め、その後作曲などを学びました。いつも歌が近くにありましたね。オルガニストでもあるのですが、オルガンには大変幅広いレパートリーがあり、中世の音楽も多い。とにかくさまざまな時代、様式、レパートリーに興味があります。ソルフェージュは、全ての楽器奏者が集まる場です。ただ従来のソルフェージュだと、ドレミ……という音名を覚えるだけで、歌ったり、楽器で弾くこともしません。でも本来は、もっとライブであるべき、もっと音楽とリンクするべきだと思います。ですから、音符を読むだけでなく、歌ったり、いろいろな楽器で弾いたりします。自分の経験から、ひとりの楽器の先生がソルフェージュのレッスンを深く実践することは易しいことではありません。この教材を使ってテクニックだけでなく、広い音楽文化があることを伝えたいと思っています。

M: 私は、古い厳格な音楽院で勉強しました。よく歌いましたし、聴き取りの練習も沢山しました。90%の生徒はソルフェージュが好きではなかったようですが(笑)、私は好きでした。楽器はヴァイオリン、トランペット、トロンボーン、クラシックではありませんがピアノも習っていました。小さい頃の厳格なソルフェージュ教育はテクニック先行で、音楽は"隠れて"いました。でも、昔は悪くて今は良いということではなく、昔と今は「違う」のです。今ではテクニックが身についたことに感謝しています。でも、そのテクニックと音楽的経験の橋が架けられていませんでした。人間は感覚の発達によって成長します。感覚が身につけば、聴く楽しみも分かりますし、もっと音を認識したり、暗譜も進みます。感覚は人間そのものです。そして音楽を通して学ぶことが何より大事。自分の記憶を辿っても、教材でのエクササイズより、メンデルスゾーンやシューベルトの歌曲を覚えています。だからこそ、従来のテクニック的な要素に、新しいビジョンを組み合わせたい。質の高さと大衆性という2つの理念を追求しながら、ソルフェージュを真の「楽興の時」にしたいと思っています。

—— 高度な質と大衆性、それはこの教材で体现されていますね。ところでおふたりはいつ知り合ったのでしょうか? また、これからの活動計画を教えてください。

C: 16年前同じ音楽院でソルフェージュを習っていた時、知り合いました。習っていたマルグリット・ラブルーズ女史 (Marguerite Labrousse) には、この教材の巻末にメッセージを頂いています。私たちにとっては、クレド (信条・信仰) です。なお、この "La Dictée en Musique" は、2009年6月に7巻目が発刊される予定です。それでこのシリーズは完結します。

♪ 「響き」問題:

ワーグナー 《トリスタンとイゾルデ》 (第6巻より)



♪ 「メロディ」問題:

リゲティ 《四重奏曲第1番》 (第6巻より)



♪ 「メロディ・和声」混合問題:

ベートーヴェン 《ピアノ協奏曲第4番》 (第6巻より)



M: 現在、よりグローバルで新しいソルフェージュ・メソッドの教材を制作中です。大きな惑星の周囲を回る衛星という感じ、ですね。

——10年に及ぶ大プロジェクトですね。次の教材も楽しみにしています！

現在フランス国内では、パリ国立高等音楽院はじめ、ボルドーやマルセイユ等の地方音楽院、スイス、ベルギー等のフランス語圏では日常的に使われており、英国・米国等からもリクエストがあるそうです。各国の先生方の方法を尊重した上で、ぜひメソッドを活用してもらえたら嬉しいというおふたりでした。

16歳の頃から15年間ソルフェージュを教え、今は作曲に専念しているというメニュー氏、現在音楽院で教えているシェペロフ氏。ふたりの音楽基礎教育への熱意と創意工夫、そして音楽文化への幅広い理解が感じられました。

〈アンリ・ルモワヌ社 Editions Henry Lemoine〉

27 boulevard Beaumarchais, F-75004 PARIS

Tél.: (0)1 56 68 86 65

Fax: (0)1 56 68 90 66

<http://www.henry-lemoine.com>

ブノワ・メニュー ホームページ：<http://www.benoitmenut.fr/>

ピエール・シェペロフ ホームページ：<http://chepelov.free.fr/>

第 11 回 芸術性を高めるソルフェージュを目指して (1) 中級レッスンレポート

※ 2009 年 5 月 15 日掲載分

ソルフェージュで、芸術性を高めることはできるのでしょうか？
音程や和音を聴き取る力、リズムを的確に刻む力、和声進行を把握する力、フレーズを感じ取る力、ポリフォニーを認識する力、他楽器を聴き分ける力……、そうした様々な要素が結び合い、「音楽を表現する力」として発揮されるためには、どうしたら良いのでしょうか。

今回は『ディクテ・オン・ミュージック (La Dictée en Musique)』(→ p.33) というソルフェージュ教本の著者インタビューをご紹介します。 「新しいソルフェージュを提案したい」と語った著者のひとり、ピエール・シェペロフ氏 (Pierre Chépélov) によるソルフェージュ・レッスン (中級) の様子をレポートします。実際の楽曲を用いながら進められるレッスンには、多くのヒントがありました。

(取材協力：パリ 13 区モーリス・ラヴェル音楽院内／第 2 課程 1 年目・13 名／平均 11-13 歳)。



グループ・レッスンの流れ (中級 1 年目のクラス)

1. ヘンデル (1685-1759) : 《王宮の花火の音楽》より 〈平和〉 (12/8 拍子)
(ア) リズム聴き取り (宿題答えあわせ)
(イ) 視唱
(ウ) シシリエンヌのリズム説明
(シンコペーション、16 分・32 分音符など)
2. リズム教本
(ア) リズム聴き取り (6/8、9/8、12/8 拍子、三連符)
(イ) テスト 6/8 拍子 2 小節
3. グリーグ (1843-1907) : 交響曲《ペール・ギュント》組曲第 2 番
(ア) 視唱+楽器演奏 (ピアノなど、各自専攻楽器)
4. ベルリオーズ (1803-1869) : 《ファウストの劫罰》より 〈シルフ (妖精) のダンス〉 3/8 拍子
(ア) 視唱
(イ) リズム聴き取り (宿題)

* 使用教材『La Dictée en Musique vol.4』, 『Lecture Rythmique』

● ソルフェージュ・レッスンのヒント (各級共通)

- ・実際の音楽を教材とする
- ・リズム、ハーモニー、メロディ、音程、様式～何にフォーカスするか、学ぶ目的とゴールを明確にする
- ・歌が全ての基本。歌うことで身体感覚と結びつける
- ・即興を取り入れてより自由な音楽性を身につける



ヘンデル《王宮の花火の音楽》より〈平和〉

この日のポイントは「シシリエンヌ (シチリアーナ) のリズムを覚えること」。3/8、6/8、12/8 拍子の楽曲を用いて、シシリエンヌに特徴的なシンコペーション、付点音符、三連符などを学びます。

まず宿題の答えあわせから。ヘンデル《王宮の花火の音楽》より〈平和〉の CD を聴きながら、予め主旋律 (オーボエ) の音程が示されている譜面に、正しいリズムを書き込む課題です。この曲は 8 分の 12 拍子で、冒頭に登場するシシリエンヌのリズムが特徴。シシリエンヌはルネサンス末期からバロック初期に生まれた舞曲で、バッハやヘン

デル、ボッケリーニなどがその形式やリズムを用いて作曲しています。フォーレ《シシリエンヌ》が一般には有名ですが、本来は古典楽曲で多用されています。この曲もそのひとつ。リズムの答えあわせ後に全員で視唱、指でもリズムを取ります。これはどの課題でも共通していますが、実際の楽曲を聴き、その旋律を歌うことによってリズムやフレーズ感を身体に取り込んでいきます。

次はリズム教本『レクチュール・リズミック (Lecture Rythmique)』を使用、ここには複雑なリズム・エクササイズが多数掲載されています。まずリズムそのものを体感するために、詩の吟唱から。6/8、9/8、12/8 拍子の各数小節には歌詞* がついており、リズムが指定されています。この歌詞を口ずさみながら、手拍子でリズムを取ったり、指でリズムを刻んでいきます。こうしてシシリエンヌのリズムに多用される付点音符や、16分音符、32分音符にも慣れさせます。

その後6/8拍子のリズムを先生が口頭で示し、聴き取ったリズムを各自ノートに書き込みます。まだ慣れない生徒たちは大奮闘！ひとりがホワイトボードに解答を書き、聴き取れない部分は他の生徒たちがヘルプ。リズム教本にはふたりで違うリズムを取る二声のエクササイズもありましたが、難しいため次週宿題にまわされました。

次はグリーグの交響曲《ペール・ギュント》組曲第2番〈イングリッドの嘆き〉。冒頭 *allegro furioso* (2/4 拍子) の後、*andante doloroso* (3/4 拍子) から8分音符の三連符が使われています。まず全員で視唱した後、各々の専攻楽器で合奏しました。



グリーグの交響曲《ペール・ギュント》組曲第2番〈イングリッドの嘆き〉

最後に次週宿題の発表。ベルリオーズの《ファウストの劫罰》より〈シルフ（妖精）のダンス〉の、リズム聴取りが課題として出されました。あらかじめ主旋律（ヴァイオリン）の音程が示されている譜面に、聴き取ったリズムを書き込みます。この曲は3/8拍子のワルツで、これも付点リズムに慣れさせるエクササイズなのです。



ベルリオーズの《ファウストの劫罰》より〈シルフ（妖精）のダンス〉

このように、この日はシシリエンヌという特徴あるリズムを軸に、8分音符を基本にした拍子(3/8, 6/8, 9/8, 12/8 拍子)を紹介。そこから派生する複雑なリズムを学び、幅広く応用が利くようにします。その際、「実際の楽曲を用いて学ぶ」「まず歌う」、という方針は一環していました。

リズムは単独で存在しているのではなく、常に音楽の流れにあります。音価を説明する前に、あるいは楽器で演奏する前に、歌うことによって身体でリズムを覚えさせることは、とても自然なアプローチだと感じました。



モーリス・ラヴェル音楽院

*Prosodie : 音韻律、ギリシャ・ラテンの詩のように音の長短や抑揚で構成された詩句。ここでは古代ローマ哲学者セネカ(Sénèque)の詩句を引用してあります。

第12回 芸術性を高めるソルフェージュを目指して(2) 音程・和声進行

※ 2009年6月5日掲載分

前回レポートした中級のソルフェージュ・レッスンから約3ヵ月後、再び同じクラスを取材させて頂きました。前はリズムが中心でしたが、今回は音程がテーマ。生徒たちはどのように学んでいるのでしょうか。

今回は2つ上のクラスのレポートもお届けします。

(取材協力：パリ13区モーリス・ラヴェル音楽院)

低音部の聴き取り&和音の音程を把握する (第2課程1年目・13名)

今回のレッスンは、音程の聴き取りがポイント。まず最初のエクササイズは、マーラーの交響曲第3番(第4楽章)より、低音の聴き取りから。ホルンとチェロのハーモニーの、バス声部(チェロ)を聴き取る演習です。低音部かつpp→pppと弱いので、耳を研ぎ澄まさなければ聴き取れません。CDを3～4回繰り返し、全員が聴き取れるようになりました。

ふだんあまり意識して聴くことのない音域や楽器の音は、おのずと「あまり聴こえなく」なります。こうした特定の音域を意図的に聴き取る演習を通して、多彩な音色や響きのバリエーションを認識し、記憶することができます(インプット)。またそれらが、音楽にどのような情緒的・色彩的効果を生み出しているかを学ぶことで、自分の楽器(例えばピアノ)を奏でる時に、音色にさらなる奥行きを与えることができるでしょう(アウトプット)。

次は音程の聴き取り。六度-七度(長六、短六、増六……等、及びその転回)を中心に学びます。このクラスではピアノ、または口頭で音程を示していましたが、2つ上のクラス(第2課程3年次)では、同様のエクササイズをモーツァルト《魔笛》を用いていました。「その和声が音楽にどのような効果をもたらすか」を、自然に意識させます(→p.42)。

その後、以前勉強したシシリエンヌのリズム。3ヶ月前に比べると、しっかりリズムが聴き取れているようです。教材はモーツァルトのクラリネット協奏曲の抜粋を使用。モーツァルトはピアノ協奏曲23番でもこのリズムを用いていますが、ルネサンスからバロック初期に多用されたリズム形式が、モーツァルトの中でも息づいていることが分かります。



ルーブル美術館では小学生～高校生の集団をよく見かけます。音楽院の生徒と同じくらいの世代。(本文と直接関係ありません)

では、中級の勉強が進むとどのような内容になるのでしょうか？

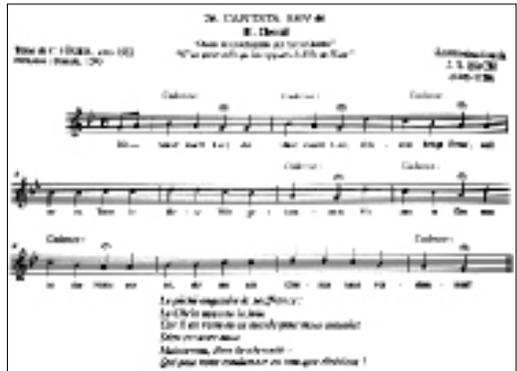
さまざまな音階と和声進行を学ぶ (第2 課程 3 年目・10 名)

レッスンの流れ

1. アラブ伝統音楽〈ミルトの庭 (Jardin de myrtes)〉
 - (ア) 二短調旋律的音階の分析
 - (イ) 様々な音階の紹介 (五音音階、四音音階……)
2. バッハ (1685-1750) : カンタータ BWV40 III. Choral
 - (ア) カデンツの種類確認
 - (イ) ピカルディの説明
3. リュリ (1632-1687) : 歌劇《アルミード (Armide)》より〈おお神よ! O ciel!〉
 - (ア) 音名視唱・調性の確認・歌唱
 - (イ) 通奏低音に和声付け
 - (ウ) 専攻楽器での演奏 (ピアノ、ギター、チューバ)

この日のポイントは「さまざまな音階と和声進行」。まずは宿題の答え合わせから。〈ミルトの庭 (Jardin de Myrtes)〉(『La Dictée en Musique Vol.5』 16 番) のメロディを聴き取る問題。アラブ = アンダルシア民謡を用いて、アラブ特有のメロディを構成している音階 (二短調旋律的音階) を分析、さらに民謡や伝統音楽の音組織である五音音階、四音音階 (テトラコード) などを説明します。

次はバッハのカンタータ BWV40 III. コラール「神の子の現れたまいしは」を用いて、カデンツのエクササイズ。16 世紀末に作曲された既存の単旋律コラールにバッハが和声付けしたカンタータで、11 小節に 5 種類 7 つのカデンツが登場します。CD を聴きながら譜面 (単旋律) にカデンツの種類を書き込んでいきますが、コラールを教材に用いることで和声進行が手取るようになります。最終小節はピカルディの三和音。15 世紀フラマン人であったピカルディの横顔が紹介されました。



カデンツの種類を学んだところで、今度は数字付き バッハ(カンタータ) BWV40 III. コラール「神の子の現れたまいしは」 低音 (通奏低音) に和声付けします。教材はリュリのオペラ《アルミード (Armide)》より、アリア〈おお神よ! (O Ciel!)〉。なぜ通奏低音を学ぶのでしょうか? 「通奏低音を勉強することで、ただ曲を弾くだけでなく、自分で音楽を作れるようになってほしいんです」とシェペロフ先生。先ほどのバッハ作曲カンタータが、このエクササイズの前置きになっていることが分かります。

各自和声付けができたところで、各々の楽器を持って合奏します。このクラスは 10 名で、専攻楽器はギター、チューバ、ピアノ等。最後は全員起立して合唱。しかし下級生クラスより声が出ない……「歌詞に気持ちを込めて、もっと情熱的に!」とこの曲に並々ならぬ情熱を注ぐ先生。この楽譜 245 ページを全てコピー・製本し、生徒に配布するほどの熱心さでした。

では、なぜソルフェージュでリュリのオペラ曲を使うのでしょうか?そこには明確な理由がありました。(第 13 回につづく)

それぞれの音程がもつ、響きや色彩感を知る

音程にはそれぞれ特徴的な響きや色彩感があります。(長六度の例*：モーツァルト《魔笛》／ショパンの《前奏曲第7番》) 楽曲の中でどのように使われているかを知ること、その音程がなぜそこで使われているのか、どのような効果があるのかを、より明確に把握することができます。

◆モーツァルト：《魔笛》



◆ショパン：《前奏曲第7番》



その後Aクラスでは、ソプラノの聴き取りへ。CDをかけながら、全員で歌いながらソプラノの旋律をなぞっていきます。一方のBクラスは同じ教材を使っていますが、ソプラノではなくバスの聴き取り。年上のクラスでは、より難しい低音の聴き取りに挑戦していました。このようにして、実際に聴いて歌いながら、和声感のある耳を養っていきます。

リュリのオペラで、パッサカリア形式を学ぶ

次はモーツァルトから遡ること約100年、リュリのオペラ《アルミード》を用いての演習です。

Aクラスでは各自の専攻楽器を持ち出し、一度主旋律を弾いた後、トロンボーンとピアノでバスをなぞり、他の生徒はソプラノを合唱します。これを何回か繰り返しました。

Bクラスではまずシェペロフ先生がピアノで、テーマとなるフレーズを様々なバリエーションを加えながら演奏します。「これはパッサカリアという形式で、同じ音形のバスを繰り返しながら(オスティナート・バス basse obstinée)、上声部を次々に変奏していきます。今日はこれを勉強しましょう。」

オペラよりパッサカリア1曲を取り上げ、まず通奏低音(ソーファーミレーレ…)に、カデンツとアルペジオを確認しながら和音を加えていきます。また三和音の第三音に刺繍音を加え、響きに変化をつけます。その後、右手で即興を入れていきました。即興といってもなかなかぱっとできるものではありませんが、センスの良い即興をした子(飛び級の11歳・ピアノ科)がひとりいました。

やや年上のBクラスでは、既に学んだ音程や和音の知識を通奏低音に生かすとともに、即興を取り入れることで、音楽の「規律と自由」のバランスを学んでいたのが印象的でした。

なぜリュリのオペラを教材にしているのか？

ところで、この《アルミード》が作曲されたのは1686年、モンテヴェルディがオペラの基礎を築き、ルネサンス期からバロックへと時代が移行して半世紀ほど経過した頃です。なぜこのオペラ作品をソルフェージュの教材に用いたのでしょうか。

まずリズムにあまり変化がなく、カデンツや調性を理解しやすいので、和声の勉強に適していること。また音域が広くないため男女とも歌いやすく、変声期の男性でも対応できること。また主題のリピートが



《アルミード》教材の表紙は、リュリの同時代人ニコラ・プッサンによるアルミードの画。プッサンは神話や宗教画を多く描いた。



リュリが仕えたフランスの太陽王ルイ 14 世
(ルーブル美術館所蔵)

多いので旋律を覚えやすい。さらにロンドやサラバンド、パッサカリア等といった舞曲や楽曲形式の勉強に適していることも、重要なポイントです。

昨年 10 月シャンゼリゼ劇場でこのオペラが上演された折、シェペロフ先生は生徒を 30 人ほど連れて観劇したそうです。生徒たちには既に馴染みの曲になっており、ソルフェージュで取り上げるには丁度良いタイミングでした。なお同主題でグルック、ロッシーニの作曲もあり、いずれもそれらも教材として使う予定だそうです。

*Claude Abromont : *Guide de La Théorie de La Musique*, Paris/Fayard, 2008

第 14 回 音楽知識と感覚を結びつけるアナリーゼとは（1）パリ音楽院アナリーゼ科

※ 2009 年 7 月 10 日掲載分

前回ソルフェージュの記事では、音楽を構成している諸要素を、実際の音楽を用いて学ぶというレッスンをご紹介しました。ではそうして得た知識を、いかに演奏に反映させ、独自の解釈に結びつけられたいのでしょうか。

今回はパリ国立高等音楽院 (CNSM) アナリーゼ科のクロード・ルドー教授 (Claude Ledoux) にお話を伺いました。2 回に分けてお届けします。



パリ国立高等音楽院。もともとメシアンがアナリーゼのクラスを作った

演奏家のためのアナリーゼクラスとは

—— パリ国立高等音楽院のアナリーゼ科には、演奏科のためのアナリーゼクラスがあると伺いました。演奏者にとって、アナリーゼにはどのような意義があるのでしょうか。

「パリ音楽院には、楽器奏者のためのアナリーゼクラスと、アナリーゼのためのクラス（指揮者、作曲家、音楽学者など）と、2つのコースがあります。前者で5年間、後者で3年間教えました。2つとも違う考え方に基づいています。演奏者のためのアナリーゼクラスは、より良い演奏に繋がるための要素をいかに提案できるか、という考えです。学ぶべき概念や知識がとても多くて、2年では十分とはいえません。もっとも自分も含めて、一生勉強……ですけれどもね。」



(c) Pierre Radisic

—— アナリーゼのクラスは何人ですか。

「クラスは最大 15 人ですね。生徒たちと密にコンタクトを取るためです。20 人以上相手ではただ説明するだけになり、ディスカッションできませんから。このアナリーゼ科を作ったオリヴィエ・メシアンは、全員一人ひとりとコンタクトを取れるようにしていました。演奏科の学生には、まずアナリーゼの必要性を理解してもらうように努めています。感じたままに弾く生徒もいますが、良い演奏になることもあるし、それほどでもない、あるいは全く感心しない演奏もありますね。個人的にさまざまな演奏家を知っていますが、例えば「20 歳のときは沢山弾けたし想像力もあった。でも 50 歳になった今、ベートーヴェンのソナタを 100 回弾いたがそれ以上何をしたいかわからない」というピアニストもいます。もしアナリーゼ的な視点を持っていれば、曲の見方を変えることもできるし、より発展させることもできるのです。例えばアルフレード・ブレンデルは素晴らしいピアニストで、彼は譜面を大変よく見えています。本人の話によると、ベートーヴェン協奏曲を録音するとき、毎回のように演奏を変えているそうです。「全ての楽譜に目を通したり、曲をアナリーゼしたり、今まで知らなかった室内楽曲を知ることによって、新しい視点が得られたから」と。つまり考え方が変わったから、演奏も変化するのです。アナリーゼはつまらないテクニクなどではなく、音楽そのものに影響を及ぼすことなんですね。」

トニック、ドミナント……というのは「感覚」

——では実際のアナリーゼクラスは、どのように授業が進められているのでしょうか。

「例えば生徒に“今はブラームスを練習しているんだね、じゃあアナリーゼしてみよう”と言います。まず演奏させて、この音楽に何が起きているのかをアナリーゼしてもらいます。初めに基本的な知識（作曲家について、ハーモニーの構造等）を問いますが、ただ、“ここがI度、V度”というのは面白くないですね。“なぜなのか？”を問いかけるのです。“なぜV度なのか、ドミナントとはあなたにとって何なのか？”ドミナントというのは感覚であり、ハツという緊張です。トニックとは人間、そして人の安定感を意味します。例えばトニック（安定）→ドミナント（緊張）→トニックに戻る。この場合、ハ長調からト長調への転調はどんな感覚をもたらすか。ブラームスやモーツァルト、ベートーヴェンにとって、この転調は何を意味しているのか。メタファーに置き換えてみましょう。調性とは、空間の集合を表すとします。ハ長調からト長調への転調は、一つの空間から別の空間へ移動することです。つまり別の空間や別の国に移動することで感覚や感情はより強くなると、個人的な体験から言えます。すると、その作品をどう演奏すればよいか分かりますね。音楽には、その作曲家が受けた感覚が反映されています。例えばC.P.E. バッハの音楽では、旋律や調性はドラマの一部です。演奏する時、旋律に気を配ること、それは内面のドラマが表現されているからです。また、“今、何調なのか”という調性に配慮することで、今音楽がどこに位置しているのかを知ることができます。そうして音楽を動かしていくことができるのです」。

「楽譜に何が起きているか」を気づかせるための要素を教える

「いろいろな演奏を聴いていると、そのとき演奏家がどのように音楽的要素を感じているかは分かるのですが、どうやってその感情を動かせばいいのか、見えない場合が多いですね。音楽の端々に強いものを感じるが、なにかうまく機能していない。それは曲の始めに感情を入れすぎるため、テンションが次々なり、どこがテンションの頂点か分からなくなってしまうからです。

素晴らしい演奏家は、楽譜を手にとり、その深い知識を彼らの感覚と結びつけます。例えばモーツァルトの協奏曲を聴いて、ただ“美しい”と感じるときと、20回以上も聞いているはずなのに“おお！”と感激することがあります。なぜか？その演奏家が、楽譜を見てそこに書かれている全ての要素を探して理解し、そこに反映されているものを批評的な視点で見た上で、彼ら自身の感情や体験とうまく結びつけているからです。そうすると完全に独自の演奏になります。このようにアナリーゼをした後、がらっと演奏が変わる生徒もいます。アナリーゼにおいて一番大事なものは、“私はあなたに真実を教えているのではなく、あなたが『楽譜に何が起きているのか』を気づかせるための要素を教えている。それをあなたの感情と関連づけ、あなたの深いところと結びつけてほしい。それを使って、あなた独自の演奏をしてほしい”ということなんです。」

——理論と実践のインテグリティを持つことですね。

「音と音の関係性」に、感覚や感情がある

「私はベルギーで作曲も教えています。音が必要なのではなく、音と音の関係性が重要”だと伝えています。音楽とは、あなたと世界、あなたと他人の関係性と同じです。例えば、ひとつの性質ともうひとつの性質が同時に機能しない、するとそこに葛藤が生まれます。この内面の葛藤がベートーヴェンの音楽ですね。この女性に恋している、しかし一方で、自分は貴族階級ではない。この二つの相容れない要素に

対して、そこに“自分はどうすればいいのか?”という葛藤がある。これが『関係』ですね。

——ベートーヴェンの音楽は、作曲家の人生のようですね。

「ええ、でも作曲家の人生で音楽を説明してはいけません。第一に、作曲家は音楽を書いたということ。第二に、自分の個人的体験をもとにその音楽をとらえること。だからアナリゼが重要なのです。客観的要素を見つけ、そこに自分の主体性を投影していくこと、そしてその要素がもつ感覚をとらえることです。作曲家の人生より大事なものは、人生に存在する『葛藤』です。それはベートーヴェンの人生だけにあったものでなく、誰もが持っているもの。自分の内面にも多くの葛藤があり、それをベートーヴェンの音楽に投影させること、それが独自の演奏につながります。まず、彼らが生きた音楽を見てください。そしてなぜ、彼はこのテクニックを使ったのかを考えること。例えば交響曲第5番の冒頭“タタタターン”、ここでは『運命がドアをたたいた』という物語が重要な

のではなく、音の断片が重要です。ハーモニーがない、次にどこに行くのか分からない、今自分がどこにいるのか分からない、という孤立感。皆さんもそんな経験があるでしょう。その孤立感をとらえることが大事です。そして次のフレーズ“タタタタ タタタタ……”が続く。こうしてフレーズを築いていくことは、自分の体験から得た感覚を織り込みながら、客観的に空間を築いていく、そして音楽を築いていくことなんです。ストラヴィンスキーは、『音楽は何も表現していない、ただ音の要素と関係性があるだけだ』と言っていますが、確かにその通りですね。作曲家は音を並べただけ、あとは人がそれぞれの体験を音楽にのせるのだと思います。それから、フランスにはこんな寓話があるんですよ。——『音楽は寓話ではなく、あなたの人生の一部であり、あなたと作曲家との関係性である。もしあなたが作曲家の人生を音楽に投影させるだけならば、あなたから真実のものが発せられることはない』——。

(後編は第15回へつづく)

クロード・ルドー ホームページ：<http://users.skynet.be/ledouxcl/>



ハイドンやモーツァルトと同時代に活躍した画家フラゴナール『La Musique』(本文とは直接関係ありません)



パリ市内 IRCAM (フランス国立音響音楽研究所) 前にあるストラヴィンスキー池
(本文とは直接関係ありません)

第 15 回 音楽知識と感覚を結びつけるアナリーゼとは（2）

～自分の感覚で捉えること

※ 2009 年 8 月 10 日掲載分



クロード・ルドー氏は連日セミ・フィナルの課題曲《V...》を、審査員席後方で身をのりだして聴いていた。ベルギー王立音楽院にて

アナリーゼは単なる楽曲分析ではなく、音楽の中にある要素から作曲家の感情を読み取り、自らの感覚や知識に結びつけるプロセスであり、また「自らの真実を語る」という姿勢を持つことが大切と、前回お話頂きました。今回はクロード・ルドー氏が委嘱作曲した 2009 年エリザベート王妃国際コンクール課題曲の演奏論に触れつつ、21 世紀に生きる我々を取り巻く音楽環境と世界観など、豊富な知識と情熱を込めて語って下さいました。

—— 2009 年エリザベート王妃国際コンクール（ヴァイオリン部門）で、二次予選の課題曲《V...》（violin & piano）を委嘱作曲されましたね。優勝したレイ・チェンさん（Ray Chen）の見事な演奏を CD で聴きました。彼は台湾に生まれ、オーストラリアに住み、現在アメリカ留学中というコスモポリタンな方ですが、演奏をどう思われましたか？



優勝したレイ・チェンさん（20 歳）
La Chapelle Musicale の庭園にて

「じつはこのコンクールが始まる前、彼から真っ先に質問を受けたんです。“あなたの作品をより深く理解して弾きたいのですが、実は練習しているときに不思議な感覚を覚えました。どこかアジア風の印象を受けたのですが、自分が台湾で経験した音楽体験、たとえば台湾の伝統音楽や精神性を演奏に反映させてもいいでしょうか？”と。

私はアジアを旅行したことがありますので、“ええ、確かにアジアの要素が入っていますよ。どうぞあなたの感覚で弾いて下さい”と答えました。そして彼は自分が思う通りに解釈し、その演奏からはアジアの香りや、独特の音の広がりを感じることができました」。

—— 特にグリッサンドに現れているように思います。

「ええ、能の音楽のようでもありますね。フレーズが始まる前に音がうわーんと立ち現れる感じがします、あるいは旋律の間から音が出てくる感じ、これはアジア特有ですね。驚いたことにチェンさん始め、アジア出身の参

加者はほぼ全員それを感じていたようです。逆に、欧米の参加者は、旋律をつなげていく音楽作りでした。どちらも美しいですね。個人的にはラトビア出身のファイナリスト、ヴィネタ・サレイカさん（Vineta Sareika）が、楽譜に一番近い解釈をしていたと思います。音楽の流れを重視し、全体の構造を上手にデザインしていました」。

—— 異なる解釈を、どのように受けとめていらっしゃるのでしょうか？

「私の曲が、様々な視点や考え方をもたらすことができたのを嬉しく思います。作曲する時は、いつもそのことを考えていますね。つまり音楽に様々な意味を持たせることで、演奏者がそれぞれの音楽的体

験・人間的経験知を踏まえて、独自の道筋や表現を見出してほしいと思っています。だから、チェンさんとサレイカさんの演奏に大きな違いがあるのです。チェンさんの演奏は、音が生まれてそれが多彩に変容していく、その一方で（楽曲の）バリエーションの変化にともなって旋律が発展していく—その論法がとても興味深く感じられました。彼は自分が体験したアジア文化を踏まえ、霊的世界と人間的感覚でとらえた現実的意識の間を、微妙に揺れ動くような解釈を聴かせてくれました。一方サレイカさんは、西洋的思考から生まれた伝統的なリリシズムに深く根を下ろしていました。曲の冒頭から美とエネルギーがほとばしり、最後までその力強い推進力が途切れることはありませんでした。曲の隅々にまで繊細な感情が織り込まれ、その多彩な感情表現がダイナミックな演奏につながっていました。ふたりともこの曲への取り組み方は全く異なりますが、ふたりとも素晴らしいヴァイオリニストでどちらの演奏にも魅了されました。また、自分の音楽がどこまで多様な解釈が可能なのか。多様性 (diversity) とはこの世界の豊かさの象徴でもあり、一音楽家としてそれとどう向き合うか、といったことを考える良いレッスンになりましたね」。



ヴィネタ・サレイカさん



ファイナリスト達の発表。(チェンは前列左端、サレイカは後列中央)

—— 多様性の広がりとともに、個人のあり方が問われてきますね。個人一人ひとりが真実を語ること、奏でることですね。

アナリーゼにおいて、「真実」はひとつではない

「じつは私のアナリーゼクラスで重要なポイントは、『真実はない』ということなんです。私は学期初めの授業で必ず言うのが、“私が考えるアナリーゼには、『唯一の真実』はなく、『さまざまな真実』がある”ということなのですが、生徒にはいつも驚かれます。つまりいろいろな考え方がある。大切なのは、私がいうことが真実ではないというならば、あなたはそれを証明、あるいは議論しなければならない。“それは真実ではない。なぜなら……”というようにね。そしてあなたが言うこと、信じるのが真実だと説得されれば、その意見を受け入れ、その体験を共有することができます。ある物理学者の友人から、面白いことを聞きました。物理学における『真実』とは、『次の真実がやってくるまでの真実』なんですね。対象物を観察して理論や法則を発見するのが物理学ですが、例えばニュートンが万有引力を発見しても、誰かが“いやいや、その理論にはこんな問題がありますよ。私が証明しましょう、真実とはこうです”と証明すれば、その新しい真実が世界の見方を完全に覆すことになります。例えば 20 世紀初頭、アインシュタインの物理的発見（一般相対性理論）によって『異なる世界の見方』が登場しましたが、それと同時期に音楽にも変化が現れました。また顕微鏡を通して『ミクロの世界』が次々解明された頃、音楽や美術にも同じような変化が起きました。例えばウィーンの画家グスタフ・クリムトは細胞の連続のような絵を描きましたし、ウェーベルンの音楽も同様です」。



ブラジルの大学で開催されたアナリーゼ講義の様子

—— こうした現象が、他分野でも同時期に現れるのですよね。20世紀初頭に調性音楽が崩壊してから100年、21世紀にはどのような変化を感じますか？

「相対的な距離感が変化しましたね。20世紀初めは物理的距離間、今はヴァーチャルな距離間です。例えば日本にいる人と気軽にスカイプで話すことができます。距離、つまり時間や空間の概念が変わると世界の見方も変わります。全ては変化していく。インディアンのことわざに、『全てのものが変化するこの世界において、唯一変化しないもの。それは'変化すること'』というのがあるんですよ」。

音楽に対して、「自分なりの視点」を持つこと



「だからアーティストや作曲家は、常に新しい要素を見つけようとするんですね。過去の要素の中から新しいアイデアを生み出そうとする。けれど全く新しいものを創り出すのだ、というのは同感しません。例えばビエール・ブレーズの作品にも、ベートーヴェンのような動きやギョーム・ド・マシヨールのホケトゥスが入っていたりします。一番大事なのは、『あなたが発見した音楽的要素を持って、何か新しいことをすること』。あなた自身の世界の見方、音楽知識やテクニックを用いることです。時々、アナリゼは難しいと感じます。我々は、ある法

則や理論に則ってアナリゼを行います。例えばバッハを伝統的和声に従って分析しようとするのですが、それは真実ではない。なぜならバッハ自身は伝統的和声を意図したのではなく、多声(を操る)技術をもって『何か違うこと』をしたのですから。モンテヴェルディも然りです。彼は旋法を元に作り出したものが、全く新しい音楽書法の発明につながりました。でもそこには予め法則などなかった。直感だけです。理論も大事ですが、常にいかなる状況にも当てはまるとは限りません。アナリゼとはそもそも『音楽に対して、あなた自身の視点を見つけること』だと思います。そして、あなた自身の感覚や意義を見出すこと。例えばバッハが現代に生きていたらどうか。あるいは、その時代においてバッハはどうであったか、あなたはどのような関係を築くのか——。でなければ、あなた独自の理論を打ち立てることはできません。多くの理論に触れるより、自分の理論を打ち立てるほうが、より音楽に肉迫することができると思います。これは私にとっても大きなチャレンジですね！」

エリザベート王妃国際音楽コンクール：<http://www.cmireb.be/en/>

【ヴァイオリン&ピアノデュオ曲《V...》試聴リンク先】

チェンさんの音源 http://www.piano.or.jp/report/03edc/art_frnc/audio/019_V-Ray-Chen.m3u

サレイカさんの音源：http://www.piano.or.jp/report/03edc/art_frnc/audio/019_V-Sareika.m3u

4. 子どもはどれだけ可能性をもっている？

第16回 「子ども脳」がもつ無限の可能性～どれだけ音楽を聞き分けられるのか

※ 2008年11月17日掲載分

これまで取材した中で、フランスの子ども達の聴く音楽の多様さ、複雑さが印象に残っています。子どもにも大人と同じような曲を、楽しいストーリーや動きのある劇にのせて聴かせる、といった工夫が随所で見られました。バロック、古典、ロマン派、近現代曲のほか、中世の教会音楽、インドやアフリカ民族音楽、ユダヤ音楽、フランスのシャンソン等々。こうした多彩なリズムやメロディ、フレーズ感は、文化や民族の多様さ、そして世界の広さを直感的に伝えてくれます。

では、果たして子どもの脳にはこうした音楽を受けとめる能力が備わっているのでしょうか？



黒川伊保子先生 (photo: 瀬戸孝之)

今回は感性アナリストの黒川伊保子先生いほこにお話を伺いました。黒川先生は1980年代にAI(人工知能)開発に携わり、その後世界初の語感分析法である「サブリミナル・インプレッション導出法」を開発した、感性分析の第一人者。随筆家としても活躍され、近著に『怪獣の名はなぜガギグゴなのか』(新潮新書)、『しあわせ脳に育てよう』(講談社)など。また本格的な競技ダンスや、ヴィオラ奏者のプロデュースをされたこともあるそうです。

今回は「子どもの聴く力」について、やわらかくリズムカルな口調で答えて下さいました。

子ども脳こそ、一流のものを！—— 子ども脳の驚異的な吸収力

「12歳までの子ども脳には、入ってきた情報を受け取る繊細さが、大人の数倍あるんです。だから子ども脳こそ、一流のものを見せないといけません。8歳が小脳の発達臨界期で、その年齢までに体得した所作、音の世界、画像の世界といった基本型が、これから後の全てに影響します。ですから、できるだけ繊細なものやさまざまなものを見聞き、触らせてあげたいですね。ただ子どもは、入力に関しては大人の何倍、何十倍も繊細なのですが、それを出力する能力は低い。例えば何十倍も情報を手に入れるけど、言えるのは“バイバイ”かもしれない。大人の何十倍も複雑な音を聞き取れるけど、本人がアウトプットするために歌う曲は、ディズニーや『崖の上のポニョ』かもしれない。それはそれでいいんです。でも、ちゃんと複雑な音も聞き分けているんですよ。」

黒川先生は現在高校生の息子さんがいらっしゃいますが、その子育ても持論に基づいています。

「私は赤ちゃんのときから息子に幼児語でしゃべったことがないんです。大人にしゃべるように話しかけていました。もちろん意思の疎通をしなければならぬとき、例えばこれは触ってはいけないみたいなときは“これは接触不能です”ではなく(笑)、“触っちゃだめよ”とは言っていましたけども。普通に“ママが森鷗外の本を読んだらね……”と6ヶ月の子に言ったら、母から“誰に話しかけているの？”といわれました(笑)。」

つまり子どもの発達過程においては、インプットとアウトプットのスキルに明らかな差があるという点を踏まえたうえで、良質なインプットを多くしてあげると、成長してアウトプットのスキルが身についた

子どもはどれだけ可能性をもっている？

とき、多様な自己表現が可能になるのです。すぐに結果を求めず、インプットとアウトプットには時間差がある、ということも認識しておきたい点です。

楽譜をラブレターだと思って開いて——4～7歳で得られる身体性

さらに黒川先生は、子どもが音楽や芸術作品に触れる際、その接し方が身体性を作っていくと指摘します。

「楽譜もそうだと思いますが、持ち主が時空を超えて残していくものは、私はすべてラブレターだと思っています。例えば自分が論文を書くときも、ラブレターだと思って書いています。論文や楽譜は『発見』であり、創生だとは思わない。自分の脳が生み出すのではなく、その日その時の自分の身体性に、宇宙がもともと内包していた何かが下りてきた、ということだと思うのです。だから自分の発見が、それに触れる誰かの気持ちを開かないといけない。決して、この知識を覚えろとして書くわけじゃない。自分におりてきた宇宙の音律を“さあ、今から見せてあげるからね”ということだと思うんです。

だとしたら、(作曲家からの)ラブレターだと思って楽譜を開いてほしいですね。もし音楽家の卵たちが教科書を開いて挑戦していく感じだとしたら、それは惜しい気がします。4～7歳は小脳が発達する時期で、おけいこ事が非常に脳に良い影響を与える時期です。義務だと思って“間違っていないかな”と思いながら音を出していくのは、その瞬間の時間ももったいない。贈り物だと思って、ワクワクしながら一つひとつの音に出会ってほしいですね」。

——そのときに得た身体性は、将来どのような影響があるのでしょうか？

「そのときに身についた身体性はブロックのピースで、ずっと何か作るときの基本の形になります。そのブロックのピースの形を多くしてあげたい。そのためには、感動とともに身体を動かしていくことが大事ですね」。

物事を習う時、「プロの所作を目の当たりにすることが大切」だとも指摘する黒川先生。できれば自分の骨格や身体性に近い人の所作を、映像ではなく、目の前で動いているのを見ること。例えば幼稚園にピアニストが出かけて演奏する、というのも効果があるそうです。

皮膚は脳とつながっているという学説がありますが、「実際に目の当たりにする」というのは、視覚や聴覚だけでなく、子どもの皮膚感覚を通して脳に刻まれていく、ということでしょう。

子どもの頃に作られる身体性がいかに大事か、また身体性の基礎ができあがる時期に、さまざまな音楽のリズム、メロディ、ハーモニー、響き、言語をリアルに聴かせて、身体の中に取り込んでいくことが大切であることに、改めて気づかされました。それは西洋クラシック音楽を弾く身体を作る、という意味でも重要なアプローチです。これについては、また別の機会にご紹介させて頂ければと思います

第 17 回 質問を通して学びを深める ～小学校と高校の授業風景から

※ 2008 年 7 月 25 日掲載分

フランス人は、とにかくよく質問し、発言します。先生が生徒に対して、生徒が先生に対して、質問はつねに双方向。学校の授業でも、音楽のレッスンにおいても同じです。この質問の多さは、質問を発すること自体に意味があるのではないか、と思わせます。今回は一例として、小学校の哲学のクラス取材した『ル・モンド誌教育版 (Le Monde de l'Éducation)』の記事と、高校の歴史教科書をご紹介します。直接アート教育とは関係ありませんが、教育現場のアプローチのひとつとして、お読みいただければ幸いです。

まず質問を考えてから、皆でディスカッション～小学校の哲学のクラスより

『我思う、ゆえに我あり』とは、17 世紀フランスの哲学者ルネ・デカルトの有名な一節です。小さい子どもでも、一人ひとり立派に意識や考えを持っています。では、それをどうひきだしているのでしょうか？

ル・モンド誌教育版の記事が紹介するのは、フランス北部トゥルコアン市にある小学校の哲学クラス。児童の学年は CE2、日本の小学校 3 年生に相当します。まずクラス全員が輪になり、担任のオードリー・ビゴ・デタイエ先生が、あるストーリーを読み聞かせます。それをもとに生徒が各自質問を考え、投票で質問を 1 つに絞った後、クラス全体でディスカッションします。

この日に使われた本は、『7 ひきのねずみ (Sept souris dans le noir)』(YOUNG Ed, Milan, 1995)。これは 7 匹の盲目のネズミが、^{ちん}闖入者の正体にどうやって気づくのか、というストーリー。ネズミはその生き物の特徴をつかんで各自仮説を立てますが、最後の 7 匹目だけが正しい結論に辿り着きました、それはなぜか？さて、いったいどのようなディスカッションが行われたのでしょうか。



水鳥を見ながら、未来の哲学者は何を思う！？

手で頭を抱えながらしばし考えた後、将来が楽しみな小さな哲学者の輪は、にわかに活気づいてきた。黒板に書かれた質問リストは、どんどん長くなる。三文字 (Oui, Non) では答えきれない質問、すなわち仮説や議論、事例、反例を呼び起こす質問が挙げられていく。そして、投票の時間になった。これからさらに掘り下げていく質問を選ぶ、大事な瞬間だ。



人々で賑わうカルチェ・ラタン付近を通る、デカルト通り

「哲学では、考えを進歩させるためによく掘り下げることが必要なんだ。たまに、深く考えても答えが出ないときがあるけど」と、9 歳のティボーがまとめてくれた。投票が終わり、質問が選び出された。これから集団討論でいろいろやり込められることになる。8 歳のオーレリーが、ある仮説を立てた。「白ネズミは他のネズミが発見した (闖入者の) 手がかりを集めて、真実を組み立てたに違いないわ。」「真実？」エロイズがその言葉に反応した。「白ネズミはまず仮定してから、それを証明したんじゃないの？学校で習う科学みたいに」。すると他の児童が反論する。

子どもはどれだけ可能性をもっている？

「ううん、証明っていつでも、科学とは違うよ！」。

(Le Monde de l'Éducation 2008年7・8月号、pp.64-65"La philo pour les petits" 抄訳)

同記事によれば、デタイエ先生の目的は、

『『子どもたちに考えさせ、熟考させること』。そのメソッドとは、『彼らに話させること。何故なら、話することによって考えが磨かれていくから』。そしてその信条は、『考えさせれば考えさせるほど、人生に対する身構えができる。そして彼らの考えを解き放せるようになります』

「自分」を創りあげるために、考えさせるのが哲学。そして、自分の考えを解き放ち、客観的に磨いていくために、グループ・ディスカッションという手法を用いています。相手がいることで、自分自身が全体の中のひとつの「個」になっていきます。フランスでは、早いところでは幼稚園からグループ・ディスカッションを取りいれているそうです。

質問を通して、自分の視点を形成する〜リセの歴史教科書より



歴史の教科書より

いっぽう、こちらは高校1年生の歴史の教科書。日本の教科書より大きいサイズで、オールカラーです。ぱっと中を見て気づくのは、とにかく質問が多いこと。全350ページにわたり、質問が1ページ5つ以上掲載されています。もちろん選択問題や、一問一答式ではありません。ひとつの史実に対して、概論のほか、写真、グラフ、統計、原因と結果を示す図、当時の広告や風刺漫画、政治家や文化人の言動、さらにそれらの分析や考察を促す質問が各ページに与えられています。

これは、いってみれば「自分の視点」を作り出すトレーニングなのです。

あるページを開いてみると……

報道機関の誕生～フランス共和国の文化を普及する手段(2p)

◆学習目的

- ・マスコミの誕生を学ぶこと
- ・大衆の言論・思想を形成する報道機関の役割を分析すること

◆分析・考察のための資料

1. 統計：1874～1914年の日刊紙発行部数の変遷（1963年/Quotidien Français）
2. 統計：1870～1910年の新聞発行部数の変遷（1972年/Histoire générale de la presse française）
3. 資料：報道の自由（1881年/クレマンソー著）
4. 資料：国会批判の風刺漫画（1905年/ポストカード画）
5. 資料：情報提供紙とオピニオン紙（1972年/Histoire générale de la presse française）
6. 資料：報道機関と政府議会の緊密な関係（1972年/Histoire générale de la presse française）
7. 広告資料：パナマ紛争におけるマスコミ報道（当時の広告3種類）

◆質問群

——資料の認識

- (1) 当時の資料か、歴史家の記述かを分類しなさい。
資料の発信元、種類、日付を明確にしなさい。

——情報を引き出す

- (2) 1881年に可決された法案によって、どのような新しい状況が生まれましたか？
クレマンソーによる報道規制についてコメントしなさい。
(3) 資料1・2から、報道機関の進化について何が分かりますか？
(4) 資料4・5を読み、報道と政界の関係について述べなさい。
(5) 資料4・5・7を読み、大衆思想の形成について報道機関が果たした役割について述べなさい。

——情報を活用する

- (6) 第三共和制下における報道機関の重要性について、あなたの意見を総括しなさい。

ほぼすべてのページにわたり、このようなアプローチが採られています。

歴史とは「遠い昔に起きたこと」ではなく、現代まで脈々と続く、人間の行為の繰り返し。自分はそれをどう考察するのか、どの資料や数字をその根拠とするのか……歴史とはこういった思考を訓練する科目、と位置づけられます。

そして次々と投げかけられる質問を通して、より説得力ある「自分の視点」を作り出すことを学びます。ゆえに質問自体も、本質に迫る勢いをもっています。アメリカ人に聞いたところ、米国の歴史教育も同じようなアプローチだそうです。

先生は、考えさせる「素材と時間」を提供

フランスの小学校や高校の教育現場で共通しているのは、児童や生徒自身の考えを発言させるため、質問が多く投げかけられていることです。そして発言することで、他人の興味や質問を喚起し、それに対して主張・補足、あるいは反論することで、自分の立場をより明確にしていきます。この繰り返しにより、自分の考えも次第に深まっていきます。決して答えがひとつではないので、「自分の考えを作る」という意思が必要になります。

ではそのプロセスにおいて、先生はどんな役割を果たしているのでしょうか？

何かを教え込むのではなく、生徒自身で考えさせるための「素材と方向性」を示し、「時間を与える」ことといえそうです。



クリュニー・ラ・ソルボンヌ駅 (Cluny-La Sorbonne)。ラシーヌ、バスカル、モリエール等、歴史に名を残した文学者、哲学者、政治家などの署名のモザイクが、天井に飾られている

5. フランス発！ユニークな音楽祭

第 18 回 リール音楽祭～多彩なショパン観が登場

※ 2009 年 7 月 1 日掲載分

フランスの夏といえば、長いバカンスと音楽祭。音楽祭シーズンの先駆けとなる 6 月中旬の 3 日間、フランス北西部リール市にて、リール・ピアノフェスティバル(Lille Piano(s) Festival, 6/12～14)が開催されました。今回は「ショパンをめぐって」がテーマ。来年のショパン生誕 200 周年を先取りする内容でした。その様子をレポートします。

(協力：恒川洋子／ベルギー在住・音楽ジャーナリスト)



演奏家それぞれのショパン観がみえる

出演アーティストは、フランス国内外の若手からベテランまで 15 名のピアニスト。プログラムは演奏者にほぼ委ねられたとあって、ショパンを巡る実に多彩な曲目が登場した。ショパンの曲そのものを掘り下げた演奏、ショパンと同時代人の作品を組み合わせた演奏、ショパンが影響を受けた文化や世界観を表現した演奏、ショパンから影響を受けた後世作曲家の演奏、ショパンの作品からインスピレーションを受けたジャズ演奏まで……。演奏家それぞれの「ショパン観」が垣間見えた 3 日間となった。



コンサートホール (Nouveau Siècle)



ロベルト・ジョルダーノ

まずフェスティバルの最初を飾ったのは、イタリア出身ロベルト・ジョルダーノ。2003 年エリザベート王妃国際コンクール 4 位の実力派ピアニストは、バラード 4 番、ソナタ 2 番、エチュード 25 番全曲を演奏、実に繊細なショパンを聴かせてくれた。決して度を過ぎることなく、知性的で抑制の効いた音色は、我々が知るショパン像を裏切らない正統的な演奏だった。(ジョルダーノは最終公演にも出演し、ピアノ協奏曲第 1 番を演奏)

フランスを代表する女流ピアニストのひとり、アンヌ・ケフェレック (13 日) は、ショパンとのカップリング曲が興味深い。ポーランドとフランス、二つの文化を軸に、まずポーランド時代に作曲した《ノクターン op72-1》、パリで作曲した《マズルカ op50》、《バルカローレ》を弾いた後、なんとサティとラヴェル (サティ：グノシエンヌ、ジムノペディ、ラヴェル：鏡) が続いた。この一見唐突な組み合わせは、ショパンにとってフランスが全く未知で新しい世界であったこと、そこから洗練された音楽的感化を受けたことを物語っていたように思う。ケフェレックのたゆたうような洒落たリズム感、やや乾いて引き締まった音色は、サティに最も発揮されていた。最後は、プログラム全体の背景に流れる「水の動き」を、リストの《水の上を歩くパオラの聖フランチェスコ》で印象づけた。



アンヌ・ケフェレック



プリジット・エンジェレル
(c)Yoko Tsunekawa

その他、プログラムで面白かったのはピアノ協奏曲や交響曲。例えば《ドン・ジョヴァンニの「お手をどうぞ」の主題による変奏曲》(pf:プリジット・エンジェレル*, リール国立管弦楽団)は、モーツァルト歌劇からテーマの一部を借用したショパンの作品。エンジェレルの軽妙洒脱な魅力と円熟味を帯びたピアノで聴衆を惹き込んでいった。一方、交響曲《ショパニアーナ (Chopiniana)》は、グラズノフがショパンの作品(ポロネーズ、マズルカ、タランテラ等)をオーケストレーションした4楽章構成の交響曲。最終楽章をタランテラで締めくくったのは、グラズノフの選曲の妙を感じさせる。いずれもこの音楽祭ならではの演目で、素直に楽しめた。

また、ショパンをテーマにしたジャズ即興 (sp. キャロリン・カサドシュ、pf. トーマス・エンコー & tr. ダヴィッド・エンコー)、1920年代無声映画&ピアノ生演奏などもあり、この音楽祭の独創的な企画が光った。

聴衆のリアクションが大きかったのは？

聴衆のリアクションがもっとも大きかったのは、アレクサンダー・バレイのリサイタル(13日)。日本ではさほど演奏機会がないが、ライプツィヒのバッハ国際コンクールでの優勝実績もあり、ヨーロッパでは着実な評価を得ている。

まるで蒸気を発しながら弾いているかのような鬼気迫る《幻想曲 op.49》の演奏は、およそ従来のショパンとはかけ離れたイメージ。しかしリスト《パガニーニによる超絶技巧練習曲》に至っては、19世紀という固有の時代性から離れ、ピアニストの感性と知覚をもって現代に再構築された感があった。耳に痛い音も時折あるが、良くも悪くも目が覚めるような演奏で会場からは拍手喝采！終演後、60枚あったCDが即完売したようだ。



アレクサンダー・バレイ (c)Yoko Tsunekawa

感覚を激しく揺さぶられるものに対して素直に反応するヨーロッパの聴衆を見て、これがクラシックだけでなく、現代音楽や前衛アートに対する積極的な理解につながっているのかと、思わず納得した。

ボランティアも大活躍！リールの街とともに楽しんで

今年リール音楽祭の観客動員は、のべ1万1千人。どのコンサートもおおむね8割～満席だった。街中に点在する5箇所の会場は、メイン会場のコンサートホール(Nouveau Siècle)だけでなく、市庁舎の地下講堂や劇場なども。リールの可愛らしい街並みを楽しみながら、「次は誰が何を弾くのかな？」と話しながら会場まで歩く時間も楽しい。駅前通りには、『天使と悪魔のパレード』と題した現代アート作品が展示されており、通行人の目を釘付けにしていた。

市民ボランティアの方々も、アーティストのお世話や会場案内・撮影など大活躍していた。「いつもこうやって舞台袖で演奏を聴いてるんだよ」と言いながら、楽しげに音楽祭をサポートしていたのが印象的だった。またスポンサーになっている、リールの伝統的銘菓店MEERT(メール)のしっとり甘いワッフルも、音楽とともに思い出すことだろう。



『天使と悪魔のパレード』
(c)Yoko Tsunekawa



今回は2010年6月11～13日まで。リール国立管弦楽団（ジャン・クロード・カサドシュ指揮）を筆頭に、ニコライ・ルガンスキー、パウル・バドゥラ＝スコダ、アナトール・ウゴルスキー、コンスタンチン・リフシッツ、エリン・ヴィルサラージェ、グリゴリー・ソコロフなど、著名ピアニストが出演予定。

* 日本では「ブリジット・エンゲラー」が一般的な表記
リール音楽祭：<http://www.onlille.com/>

第 19 回 ラ・ロック・ダンテロン音楽祭

～小さな村から発信する、大きな音楽のエネルギー

※ 2008 年 10 月 1 日掲載分



南仏の素朴な風景は、かつてセザンヌやゴッホを魅了した

照りつける南仏の太陽、日差しを優しくおおう木々、セミの鳴き声、自然の息吹の中で聴こえてくるピアノの音色……。

ラ・ロック・ダンテロン (La Roque d'Anthéron) は、アヴィニョンとエクス・アン・プロヴァンスの間に位置する小さな村である。人口 5,000 人あまりで、車で村を通り抜けるのに 10 分とかわからない。そんな小さな村で音楽祭が始まって 28 年、世界中の音楽ファンを魅了し、今や世界最大のピアノ祭典のひとつとして知られている。今年 は 7 月 19 日から 8 月 22 日まで開催され、アルフレッド・ブレンデル、アルド・チッコリーニ、グレゴリー・ソコロフ、ダン・タイ・ソン、アルカディ・ヴォロドス、ボリス・ベレゾフスキー、若手のラファウ・ブレハッチ、プラメナ・マンゴヴァ等の国際コンクール優勝・入賞者、ジャズ界の重鎮ハービー・ハンコック等など、アーティスト総勢 400 名が出演、全 99 公演が行われた。1 ヶ月間でのべ 80,403 人が来場し、その規模の大きさが伺える。



(c)Xavier ANTOINET



(c)Isolde UHLBAUM



(c)Jaune PASCAL



(c)Jaune PASCAL

南仏の森の中に、音楽が流れる

ホールはまさに森の中にある。約 2300 人を収容するメイン会場フローランス城公園 (Parc du Chateau de Florans) は、半球型のドームでステージが覆われ、その周りをぐるっと細い池が取り囲んでいる。夕方 18 時、夜 21 時から行われるコンサートは、昼の暑さから解き放たれ、毎晩のように心地よい音楽の夕べを演出してくれる。

この会場では、おもにピアニストによるソロ・リサイタルや室内楽が行われるが、「ショパンの夕べ (Nuit du Chopin)」「ピアノの夕べ (Nuit du Piano)」「発見の夕べ (Nuit de la Découverte)」といったテーマ別の催し物も企画されている。なかでも「ピアノの夕べ」は長い夏の夜を存分に楽しめるよう工夫されており、20 時、21 時半、23 時開演の 3 枠を、一人のピアニストがさまざまなアーティストとコラボレーションするというもの。共演者によって音楽の作りが変化し、楽しみが倍増する。



森の中に作られたコンサートホールは約 2300 人を収容

さて筆者が到着した日、メイン会場ではミッシェル・ベロフによるメシアン《幼子イエスに注ぐ 20 の眼差し》(全曲)の演奏会が行われた。開演は夜 21 時、すでに日は暮れ、夜風が冷たい。かすかに木がざわめく音が聞こえる。



ミッシェル・ベロフによる迫真のメシアン
(c)Jaune PASCAL

しかしベロフの澄み切った音色、自然の音を凌駕する和音の連なりに、いつしか肌寒さも葉ずれの音も忘れて聴きいった。喜び、力強さ、神聖さ、畏怖、……壮大かつ深遠な世界観が描き出され、自然の中に放たれていく。しかしそのまま消え去るのではなく、強く静かなる主張をともなって我々の耳に宿った。自然の中で弾くのは「インスピレーションが沸く」と、ベロフ本人は終演後に語っていた。

アンコールが終わり、会場を後にする頃には、すでに 23 時を過ぎていた。音楽祭の聴衆のために、期間中は朝 4 時まで店が開いているという。長い夜をゆったり過ごすのにふさわしい、余韻のある演奏会であった。

8 万人の聴衆を魅了する企画～プロヴァンス一帯に広げて

それにしても、この小さな村のどこに、世界中のアーティストを集め、数万人の聴衆を受けとめる力があるのだろうか？

同音楽祭の創設者であり、現在も芸術監督として全公演を企画・統括するルネ・マルタン氏(René Martin)にお話を伺った。氏は日本でもおなじみ「ラ・フォル・ジュルネ (La Folle Journée)」を、1995 年にナント市で立ちあげた立役者である。1981 年に始めたラ・ロック・ダンテロン音楽祭に、氏のプロデューサーとしての原点があるといえそうだ。

「この 28 年間で、聴衆はどんどん増えています。ここ 10 年間は平均して 6 万人、今年のはべ約 8 万人の方にご来場頂きました。」

メイン会場だけでなく近郊の教会や古城も利用し、会場は合計 12 か所。ホールという「点」ではなく、ラ・ロック・ダンテロンを中心としたプロヴァンス地方という「面」を余すことなく生かしている。聴衆は地元住民が約半数だそうだが、パリや国内の地方都市、海外からやってくるファンも多い。車で会場を移動しながら、音楽とともに南仏の雰囲気全体を味わっているのだ。

聴衆の数は 28 年間でほぼ 9 倍の成長を遂げているが、アーティストの魅力や演奏力に加え、企画にも工夫があるのだろう。全 99 公演のうち、14 公演は無料である。また未来の聴衆を育てるべく、大人チケット 1 枚に対し、子ども 1 人が無料入場できる演奏会もある。では、プログラムはどのように構成されているのだろうか。

「同じエスプリのものを同じ日に組み合わせるなど、プログラムには関連性をもたせています。たとえば今年、2005 年ショパン国際コンクール優勝者ラファウ・ブレハッチを招聘しましたが、同日の夕方 18 時の部には、次期優勝候補と私が期待する若いピアニストを入れました。現代曲を集めることもありますし(ジャズもある)。ジャンルが違うものでも、一本の糸でつなげるようにしています。全体構成、出演アーティスト、演奏曲目の選択は、すべて私



土曜日の午前中にたつ村のマルシェ。
新鮮なオリーブが並ぶ



「ダダダ...」という音に振り返ると、
ピアノがトラクターで運ばれてゆく最中



プログラムを配るババのお手伝い

ひとりで手がけています。これは大変やりがいがあります。ラ・フォル・ジュルネの時は約 700 曲ありました。そのために、日ごろから沢山音楽を聴くようにしています。自宅には、2 万枚の CD を所有しています。最近では日本に行くたびに、毎回 50 枚ほどの CD を購入しているんですよ。マックス・レーガーなど、まだ聴いたことがない曲もありますので。とにかくすべてのジャンルの音楽を聴くようにしています」。

氏はバルトーク作品との出会いによって、ロックからクラシック音楽に転身した経歴をもつ。時代・様式・ジャンルを自在に超える柔軟な企画力は、そこで養われたものだろう。



公演の写真や掲載紙が掲示板に貼り重ねられていく。作業はボランティア・スタッフ。中には各地の音楽祭でボランティアを務めるベテランも



ラファウ・プレハッチはショパンの 24 の前奏曲、ドビュッシーの版画などを演奏 (c)Jaune PASCAL



2008 年グラミー賞年間最優秀アルバム賞を受賞した、ハービー・ハンコックのステージ (c)Xavier Antoinet



チッコリーニの演奏 (c)Jaune PASCAL

多くの現代曲もプログラムに～メシアン生誕 100 周年に際して

プログラムはバッハ、ベートーヴェン、ブラームス、リストなどの古典やロマン派も多いが、現代曲が多く演奏されるのも同音楽祭の特徴のひとつ。今年はメシアン 100 周年にあたるが、思い入れは何か？



(c)Jaune PASCAL

「メシアンはとても好きな作曲家です。《峡谷から星たちへ……》《トゥランガリーラ交響曲》《神の御前における 3 つの小さな典礼》など、プログラムに入れたことがあります。《幼子イエスに注ぐ 20 の眼差し》は、これまで 5 回いれてますね。すべて違うピアニストが演奏しました」。

今回は 8 月中旬の 2 日間、メシアンのレクチャーを午前中に、夜にコンサートを組んだ。レクチャーはフローラン・ボファールが、コンサートは前述のペロフ、そして児玉桃やダヴィッド・グリマル (vn.) らが《ピアノとヴァイオリンのための幻想曲》*、《世の終わりのための四重奏曲》

等を演奏した。

昨年もシュトックハウゼン等、20 世紀音楽を多くプログラムに入れたという。来年は 1 週間にわたり、ボファールによる現代曲のアナリーゼ講座が予定されている。

新しい価値観の発信～ピアノ協奏曲の世界初演も

つねに新しい曲、新しい企画に挑戦するマルタン氏だが、コンチェルトの作品選択にも工夫がある。

「モーツァルトのコンチェルトは、毎年 3、4 公演入れています。ここプロヴァンスでは夏の夜、よくモーツァルトが演奏されるのですが、本当に素晴らしいですよ。来年は 3 つの新しい協奏曲を予定しています。



3夜にわたるモーツァルト協奏曲の夕べ
(ソリストはセヴェリン・フォン・エッカード
シュタイン) (c)Xavier Antoinet

普通のコンサートでは、一度も演奏されたことがない作品です。19世紀初頭にフランスで活躍したフェルディナンド・エロール*という作曲家で、シューベルトと同時代人です。オペラを作曲しオペラ・コミックで演奏されたこともあります。ピアノ協奏曲も素晴らしいのです。(来年の)ラ・ロック・ダンテロン音楽祭が、世界初演になります」。

*Ferdinand Hérold (1791 ~ 1833)

ラ・ロック・ダンテロン音楽祭から、新しい人や価値観を生み出したという意志は、若手アーティストの発掘・支援にもつながっている。今年もショパン国際コンクールやエリザベト王妃国際コンクールなどの優勝者や入賞者を招聘し、その才能に活躍の場を与えている。また「発見の夕べ」と題されたコンサートでは、2006年ダブリン国際コンクール優勝者で、来日経験もあるロマン・デシャルム等が出演した。

マルタン氏曰く、「ラ・ロック・ダンテロン音楽祭で若手アーティストのクオリティを保証し、世界に向けて発信するのです。まだ勉強中の若いピアニストにも注目しています。たとえばジャン・フレデリック・ヌーベルジェとか、アンドレイ・コロベイニコフ等も才能がありますね。」



終演後、多くの聴衆にサインを求められる
アンドレイ・コロベイニコフ

ロシアの新鋭コロベイニコフは、5年前(当時17歳)から知っているという。すでに2004年スクリャービン国際コンクール優勝という経歴を持つが、コンサートではスクリャービンの鋭敏な感性と激情を音楽の細部に盛り込み、満員の聴衆は拍手喝采と足踏みでその演奏を讃えていた。マルタン氏には数年前から、その光景が見えていたのだろう。「若いアーティストに成長の機会を与え、未永く見守るのも楽しみのひとつ」と語る。



ルネ・マルタン氏
(c)Yoko TSUNEKAWA

この音楽祭には、何年も通い続ける常連の聴衆やボランティア・スタッフも多い。ここには世界中から集まる一流アーティスト、演奏者の魅力やピアノ曲の面白みを引き出す企画、そしてアットホームな雰囲気がある。音楽は楽しむものという原点、そして童心に帰れる空間なのかもしれない。来年は2009年7月24日～8月22日に開催予定。ピアノ協奏曲(エロール)の世界初演もあり、新しい音楽と出会う場としても、楽しめるだろう。

*2006年、児玉桃らにより同音楽祭で世界初演

子どもの可能性を広げるアート教育・フランス編

著者 菅野恵理子

発行 一般社団法人 全日本ピアノ指導者協会

〒170-8458

東京都豊島区巢鴨 1-15-1

TEL : 03-3944-1583

FAX : 03-3944-8838

<http://www.piano.or.jp/>
